

# 長春眞人とその西遊

窪 徳 忠

- 一 はしがき
- 二 丘長春の略傳
- 三 チンギズ汗の招き
- 四 全眞教の教理と西遊の動機
- 五 むすび

## 一 はしがき

十二世紀の中葉、當時金朝の治下に屬していた華北の地方に、全眞・太一・眞大道となづける三つの道教教團が、あらたにならびおこつた。これらの三教團は、そのあいだに多少の相違はあるけれども、いずれも成立當時の社會状態や宗教思想界の趨勢を如實に反映して、古くからの傳統をもつ正一教や茅山派などに比べて、著るしく異なつた性格をもつている。これら三教團の特色ともいへべきその性格は、全眞教團においてもつとも明白にとらえることがで

きる。というのは、太一・眞大道の兩教團が元代中期でその法系を絶つたのに對して、三教團中もつとも強大な教勢をもち、中華人民共和國成立の直前までその命脈を保つたために、關係資料の量が他の二派に比して格段に多いからである。

全眞教團の性格や教理は、まとまつた資料がないので、開祖王重陽以下の全眞道士たちの語録、詩詞、もしくは傳記にみえる言動などを克明に綜合した上でなければ、その全貌を明らかにすることはむずかしい。けれども、ごく大體のところは、開祖が立教の主旨を簡明にいいあらわしたと傳えられている立教十五論によつて、把握することができる。そこで、いま立教十五論を中心とし、他の語録や詩詞などをあわせて考えてみると、全眞教團には、唐代以來の三教調和思想に立脚して、とくに禪宗的傾向がつよいこと、符籙や禁呪を排して、不合理な不老長生を説かないこと、すなわち合理的なこと、平易で庶民的なこと、および實踐的なことなどの四つの性格が認められるようである。全眞教團の性格と内容を紹介するためには、これらの點について、一々具體例をあげて説明しなければならぬけれども、すでにごく簡單ながら發表したことがあるので、必要な點については本文中でのちにふれることとし、ここでは省略にしたがう。ただ、三教調和思想に立脚することについては、いささか横道ながら、一言しておきたい。吉岡義豐氏に、つぎのような説があるためである。

元來、全眞教は教祖王重陽が三教の精神を一爐鼎の中に融合して、そこから抽出した新思想、即ち全眞という教を以て唱道したもので、それは佛教でも儒教でも道教でもなく、またそれ等を離れたものでもなかつた。(中略) 全眞教はもとより佛教ではない。さりとして道教でもない。後には道教の一派となつたが、開教當時、すくなくとも、至元佛道論争の中心に立つた丘長春の直弟子たちの頃までの全眞教を道教というのは當らない。あくまで全

眞教という新宗教であつた。しかも、その精神態度は全く禪宗とえらぶところがない、といつてよい。(2)

完顔璫の撰した「終南山神仙重陽眞人全眞教祖碑」——以下完顔璫碑と略稱する——によれば、王重陽は弟子たちに般若心經、道德經、清靜經、孝經の讀誦をすすめ、山東地方で五つの會をつくつた折には、たとえ三教平等會(萊州)、三教七寶會(文登)などのように、必ず「三教」の文字を冠している。そうして完顔璫は、このような王重陽の態度に對して、「眞人(王重陽)者。蓋子思達磨之徒歟。足見其冲虚明妙。寂靜圓融。不獨居一教也」と評して(3)立教十五論や王重陽以下の全眞道士たちの詩集にも、三教調和、道佛一致をのべたものが數多く認められる。(4)また王重陽は忠や仁を賞揚し、中道を力説している。さらにきびしい戒律があり、清規がたてられ、のちにのべるように、打坐すなわち坐禪をすすめ、佛家の自利・利他にあたる二門までたてられている。このような點からみれば、全眞教團は、儒教でも佛教でも道教でもなく、「あくまで全眞教という新宗教であつた」ということもできるようである。

けれども、王重陽の歿後五十六年にしてその傳記を撰した完顔璫は、その傳記のなかで

夫三教。各有至言妙理。釋教得佛之心者達麼也。其教名之曰禪。儒教傳孔子之家學者子思也。其書名之曰中庸。

道教通五千言之至理。不言而傳。不行而至。若太上老子無爲眞常之道者。重陽子王眞人也。

と、元遺山は

貞元正隆以來。又有全眞家之教。咸陽人王中孚倡之。譚馬丘劉諸人和之。本於淵靜之說。而無黃冠襪履之妄。參以禪定之習。而無頭陀縛律之苦。畊田鑿井。從身以自養。推有餘以及之人。(5)

とのべ、金の辛愿も

今所謂全眞氏。雖爲近出。大能備該黃帝老聃之蘊。然則涉世制行。殊有可喜者。(下略)<sup>(6)</sup>

とみている。すなわち、吉岡義豊氏のいわゆる「至元佛道論争」以前の人々が、みな全眞教團を道教教團と考えているのである。王重陽自身も、當時著名であつた呂純陽その他の道士五人の名を集めて全眞教の五祖説をたて、もしくは自説の根據を道德經や陰符經あるいは黃庭經などに求めている。<sup>(7)</sup>

さらに私見によれば、全眞教の根本は、「至元佛道論争」の以前と以後とを問はず、あくまで性命の奥義をさぐることにおかれていたようである。性命の奥義をさぐるとは、佛教用語でいえば悟りの境地にいたることであるが、性とは根本の精神であり、命とは人間の生命の根元である氣のいみである。氣は別に元氣ともいい、古くから道教でたとばれている。導引、調息または胎息、房中術などは、すべて氣をたもつ方法として説かれている養生術であつた。清和真人北遊語録卷二には、調息法を王重陽がひそかに馬丹陽に傳えていたという話がでてゐる。従つて、全眞教の根本は、實は古來の道教々説の上に立脚していたといわなければならない。道教ではまた、古くから無爲自然であるべきことが強調されていた。全眞教では、この上にさらに清淨であることが要求され、無爲自然清淨であれば、眞の神仙であるとさえ説かれてゐる。<sup>(8)</sup>この場合の「神仙」とは、性命の奥義を悟りえた得道者といういみであつて、古來慣用された「仙人」をさす言葉ではない。全眞教では、古來の道教用語に別のいみをもたせて使用する場合が多いが、この「神仙」もその一例である。また、禪の用語を使用しても、禪とまつたく同意としては使わず、いわば形而下的に用いる場合もないではない。従つて、一言で全眞教の教理の内容や性格をまとめるならば、儒佛二教をとりいれ、それら兩教の用語を借用して、中心をなしている古くからの道教教説に新しい解釋や説明を施したといふことができ。すなわち、あくまで道教が中心なのであつて、「全眞教を道教というのは當らない」といふみ方こそ「當らない」

と思われる。<sup>(9)</sup>

吉岡氏は、「後には道教の一派となつた」という。いつごろから道教になつたとみるのか、どの點がどう變つたならば「道教」といえるのか、それらの説明が一言もないのではつきりしないが、このような表現が使われることは、結局「道教」の概念規定が明確に把握されていない結果、および全眞教の教理史を克明に時代をおつて考えられなかつたためと推測される。私のみたところでは、開教當時でも、「至元佛道論争」のころでも、教理的にはほとんど相違がないようである。しかも吉岡氏は、舊著「道教の研究」では、全眞教を道教として扱つていて、その間の考え方の變化發展については、一言の説明もみいだされぬ。全眞教團にやや先行して成立した太一・眞大道の兩教團においても、右にのべたような性格がほぼ同じようにみいだされるのであるから、吉岡氏の筆法をもつてすれば、この兩教團もまた道教ではなくなるわけである。こんなわけで、現在の私としては、吉岡氏のみ方については贊意を表わすわけにはいかなないのである。なお、吉岡氏は「至元佛道論争」というが、至元辯僞錄の本文によるかぎり、論争は主として憲宗朝に行なわれたのであるから、このよび方は妥當ではない。

筆があまりにも横道に走りすぎたので、もとにもどそう。

右のような性格を全眞教團にそなえさせ、教團としての基盤をつくりあげたのは、開祖王重陽と、ふつう第二祖とよばれている丹陽眞人馬鈺、ことに後者であつた。<sup>(10)</sup> そうして、そのような基盤にもとづいて、教團を世俗的に大いに發展させたのが長春眞人丘處機である。そこで私は、教團の實踐的、もしくは信仰的組織者は馬丹陽であり、企業的組織者は丘長春であると考ええる。従來から全眞教團をとりあげる場合には丘長春が過大視され、姚從吾氏のごときは第二代大師といひ、梅崎諦道氏は全眞教の大成者とみている。<sup>(11)</sup> 第二代とみるのは、「全眞第二代丹陽抱一無爲眞人馬

宗師道行碑」と題する傳記の存在によつて明らかなごとく、まつたくの誤りであり、大成者というのも、丘長春が教理を大成したわけではないから、いささか妥當をかく表現である。それにしても、丘長春が元初の全眞教の教團勢力伸張の上に果した役割ははなはだ大きかつた。

日本でもほぼ同じ傾向が認められるが、中國のような封建國家においては、國家から認められなければ、宗教々團はその存立がゆるされなかつた。萬一、反封建勢力、もしくは國家にとつて好ましくないものと爲政者から認定された場合には、直ちに左道または教匪などという烙印をおされて弾壓されてしまうのである。逆に、國家もしくは帝王から好ましいものとみられて、その保護をうけることができれば、その教團は安定し、大いに教團勢力をのほすことができた。そこで、教團の幹部はつねに國家權力に結びつき、もしくは皇帝の思召しにかなうように腐心したのであつた。全眞教團でいえば、王重陽の歿後、馬丹陽が第二祖の立場にあつた際に、金朝から弾壓をうけたことがあつた。そこで馬丹陽は、そののち従前の方針を改めて金朝と結びつくべく心がけ、その意圖にそつて、他の王重陽の弟子たちも金帝の召しに應じて宮中に赴いている。その結果、ようやく隆盛に赴きつゝあつた矢先に、北方に出現したのが、モンゴル、のちの元朝であつた。その太祖チンギズハンの召しに應じて、折柄西征中であつたそのもとにいたり、絶大な信任をえた全眞道士が丘長春であり、その長途の旅行がいわゆる「西遊」である。元代における全眞教の教團勢力の伸張と隆盛さには、いくたの原因がかぞえられるけれども、丘長春の「西遊」の成功した結果がその主なるものであるから、かれが初期の全眞教團にとつてきわめて重要な人物の一人であり、その「西遊」がきわめて重要な意義をもつ事件であることは、ここに喋々するまでもあるまい。

丘長春の「西遊」については、すでに早く佐中壯、梅崎諦道の兩氏が、近くは姚從吾氏が、それぞれ高見を發表し

ておられる。<sup>(12)</sup>けれども、それらの説のなかにはいささか首肯しがたい點がある上に、教理と結びつけられてもいないので、ここに全眞教の教理を通じて「西遊」に關する私見をのべ、大方の示教を請いたいと思う。そこで、順序としてまず丘長春の略傳を紹介しつつ教理の一端を説明し、ついで「西遊」におよぶことにする。

## 二 丘長春の略傳

丘長春は、長春眞人としてその名が世にひろく喧傳されているだけあつて、その傳記、道行碑、および關係の資料の數ははなはだ多い。<sup>(13)</sup>けれども、これら多くの所傳にはかなり出入があるので、ここでは丘長春死歿の翌年（二二二八）に記るされた「長春眞人本行碑」（陳時可撰）を中心とし、他の資料で補いつつ、ごく概略の傳記をのべることにしたい。

金蓮正宗仙源像傳や七眞年譜、あるいは輟耕錄卷十などによると、丘長春は金の熙宗の皇統八年（一一四八）正月十九日、山東省棲霞縣濱濱都里の一農家に呱呱の聲をあげた。その生家について、金蓮正宗記には棲霞縣におけるもつとも名族であつたとあり、歴世眞仙體道通鑑續編には世々顯姓として知られていたとみえ、輟耕錄には世々善門と稱されたとのべてあるが、おそらくこれらの言葉は傳記に使われる常套の讚辭にすぎないと思われる。というのは、輟耕錄に祖父が農を業としていたとあり、北京の白雲觀の老律殿の前に現存している「長春丘眞人道行碑」には、「家世爲金編民」と記るされているからである。そうしてその家が豪農であつたか貧農であつたかはつきりしないけれども、「編民」とあるからには、さほど裕福な家であつたとは思われない。おそらく、ごくありきたりの農家であつたで

あろう。入道前のかれの名や字が伝えられていないことも、この推測をたすける一證となるであろう。

誕生以來入道にいたるまでの間のかれの生活や動靜についても、またよくわからない。「長春真人本行碑」には、「幼聰敏。日記千餘言。能久而不忘」とあるが、完顔礪碑には

又有登州棲霞縣丘哥者。幼亡父母。未嘗讀書。來禮真人（王重陽）。使掌文翰。自後日記千餘字。亦善吟詠。訓名處機。號長春子者是也。

とあるから、農民の子としてそだち、學問などはまったくしなかつたことと判斷される。従つて「長春真人本行碑」の「日記千餘言」は、完顔礪碑によれば、入道後のことであつて、撰者陳時可が入道後のことを入道前のことと誤り解して記した結果に相違あるまい。また、元史や輟耕錄には、幼少の丘長春の人相をみたある人相見が、この子は將來神仙宗伯となるであろうといつたという傳えがみえているが、おそらく後人の作爲による虚飾の傳えであろうと推測される。ただかれが、うまれつき明敏かつ聰明であつただけは、ほぼ疑いをいれないように思われる。

さて、丘長春の出家入道、および王重陽に師事するようになった時期については、諸書によつて一致を缺いている。「長春真人本行碑」には、年月を明記せず、ただ「未冠學道。遇祖師重陽子于崑崙山之煙霞洞」というのみである。完顔礪碑によれば、王重陽が崑崙山（山東省牟平縣東南）の煙霞洞に入つて道を修め弟子を教導したのは、金の世宗の大定八年（一一六八）二月末以來のことであるから、本行碑にしたがえば、丘長春が入道して王重陽の弟子となつたのは、大定八年二月以降、かれ二十一歳のときのことになければならない。けれども、かれの詩集樞溪集卷一の「堅志」と題する一詩には

吾之向道極心堅 佩服丹經自早年



遁跡巖阿方十九 飄蓬地里越三千

無情不作鄉中夢 有志須爲物外仙

假使福輕魔障重 挨拶功到必周全

とあつて、かれ自身が十九歳で「遁跡」したと詠じているのであるから、「長春真人本行碑」の記述は誤傳としなければならぬ。磻溪集の陳大任の序に「未冠一年。遊崑崙山。遇重陽子王害風。一言而道合」というのも、入道の年齢だけは正しいが、王重陽にあつたというのは誤りとなる。

七眞年譜、歷世眞仙體道通鑑續編、金蓮正宗仙源像傳、「長春丘真人道行碑」などには、大定六年（一一六六）十九歳にして俗縁を絶つて出家入道し、崑崙山中にこもつて修道生活をはじめたとみえている。姚從吾氏は、このことは、文登縣志に收められている「丘公煙霞洞記」に、「大定六年。予自棲霞而來。洎八年。重陽師尋至」とある一句によつて、確かめられるという。一方、七眞年譜大定七年の條には、「九月。長春真人自崑崙山來。謁祖師于全眞庵。請爲弟子」とあり、金蓮正宗仙源像傳、歷世眞仙體道通鑑續編、輟耕錄、「長春丘真人道行碑」などにも、同様のいみの記述がみえている。そこで、これらを綜合してみると、丘長春は大定六年に十九歳で入道し、崑崙山に入つて修道していたところ、翌年王重陽が陝西地方から山東地方にきたことを耳にして、山を下つて入門を請うたことになるわけがある。

さきに引いた「堅志」と題する一詩のなかには、「丹經を佩服すること早年よりす」という一句があり、輟耕錄には「年十九。辭親居崑崙山。依道者脩眞」とみえている。このことと前述の入道關係の傳えとをあわせて推測すると、幼少にして父母を失つた丘長春は、おそらく親族の家に養われつつ一農家の子として少年時代をすごすうちに、しだ

いに自分の境遇や前途にみきりをつけるようになった。そのようなときに、ふとした機會に目にふれた金丹道關係の書物にひかれて、出家をのぞむようになったのであろう。そうして、十九歳になつたとき、ついに意を決して俗縁をたち、ある道者——隱士あるいは道士かもしれない——に導かれて崑崙山に入つて、その道者について金丹道關係の修行をしていた。そのうち、王重陽が山東地方にきて、寧海（山東省牟平縣）の馬從義——のちの馬丹陽——の家の敷地内に全眞庵をたててもらつて布教している由を耳にしたので、山を下り、折柄馬從義の教化に腐心している最中であつた王重陽のもとにいたつて、弟子の列に加えてもらうように願つた、という順序になるのではないかと思われる。丘長春をみた王重陽は、その願いをいれて、名を處機、字を通密とし、長春子という道號を授けて、弟子の一人に加えるとともに、金鱗の一詩を贈つて、その前途をあげました。金蓮正宗記や歷世眞仙體道通鑑續編などによれば、その金鱗の詩とはつぎのごときものである。

細密金鱗戲碧流 能尋香餌會吞鈎

被予緩緩收綸線 拽入蓬萊永自由

こうして、後年の全眞教團の隆盛さをもたらす種子をまいた長春真人の、一介の全眞道士としての生活が始められたのであつた。

梅崎諦道氏は、「長春真人研究抄」と題する論文のなかで、丘長春の入道に關連して

七眞の中で長春が最も優れてゐたことは、重陽が彼を一眼して大いにこれを器としたことが傳へられてゐる（元史丘處機傳）のに依つても知られるし、「密國公孿碑」（「長春道教源流」卷二所引）に傳重陽之學者。七賢而四子爲最。世所謂丘劉譚馬也。（中略）四子之中。世固推長春爲首矣。とあるのに依つてもわかる。

とのべて、七真人のうちで丘長春がもつともすぐれていたと考えている。七真人とは、王重陽の七人の高弟、すなわち馬丹陽、譚長眞、劉長生、丘長春、王玉陽、郝太古および馬丹陽の妻孫不二の七人の謂であり、前四者を四哲、後三者を三大士ともいう。そこで、梅崎氏がひかれた「密國公壽碑」——私のいう完顔壽碑——の四子とは、馬・譚・丘・劉の四人すなわち四哲をさしているのである。

梅崎氏は、一見して大器としたという一句を重視する。けれども、たとえば金蓮正宗記卷五玉陽王真人の條によれば、王重陽は一見して王玉陽の非凡を見抜き、甘水仙源錄卷二所收の廣寧通玄太古真人郝宗師道行碑（徐琰撰）によれば、同様に郝太古の「仙質」を見抜いて、かれを弟子にしたとある。馬丹陽の場合も同様である。ことに馬丹陽の場合、最初に一見した折にその道門の大器である由を見抜いたからこそ、ためらう馬丹陽をいわば強制的手段をもつて強引に弟子としたのである。したがつて、「一見して器」としたのは、なにも丘長春の場合のみにかぎられているわけではない。かつ「一見して道門の大器とする」とは、道士の傳記にしばしば使用される表現であるから、おそらく出家者の傳記に使用される常套句のたぐいと考えられる。かかる信憑性にとぼしい表現に立證や立論の根據をもとめるのは、すこぶる危険といわなければならぬ。

梅崎氏が第二の論據としてひく「密國公壽碑」の文は、實は完顔壽碑の本文ではない。私の知る範圍内では、完顔壽碑は、甘水仙源錄卷一に收められているほかに、なお金石萃編卷一五八および長春道敦源流卷一にも收録されているが、この兩者にも梅崎氏の所引文はみえていない。ただわずかに、碑のつぎのような銘文中の一段に共通點がみだされるけれども、梅崎氏が必要とする最後句はみえない。

(前略) 四子傳化。四子爲誰。丘劉譚馬。德其亞者。王郝與孫。共成七賢。贊我真人。玉陽長春。大啓其門。(下

略)

ところが、長春道教源流卷二の冒頭には、つぎのような一段が記るされている。

酥醪洞主曰。予讀密國公璫碑。稱傳重陽之學者七賢。而四子爲最。世所謂丘劉譚馬也。璫碑作於金正大二年。時長春尙在。(分註略) 四子之中。世固推長春爲首矣。

ここにいう酥醪洞主とは、著者陳教友の謂であるから、この一文は著者陳教友が、完顔璫碑を一讀したのちに、正大二年のころの世人が丘長春を四哲の首位におく理由を推測したものである。そうして、梅崎氏の密國公璫碑としてひく文は、實はこの文であつたのである。完顔璫碑を、陳教友のよび方をおそつて、「密國公璫碑」とよんでいることもその裏書となる。陳教友は、清朝の咸豐同治の間の道士である。従つて、その推測をもつて丘長春在世當時の世評とみるわけにはいかない。また正大二年ごろの世評が、かりに丘長春を四哲の隨一とするものであつたにもせよ、陳教友の推測するように、それは當時丘長春のみが在世中であつたためであつて、かれを隨一とみるのが眞に妥當か否かは、別の問題になる。このようにして、梅崎氏の論據とする二點は、ともに論據とすることのできない性質のものなのである。

丘長春がきわめてすぐれた全眞道士であり、その努力によつて、全眞教の教團勢力が大きく伸張したことは、まぎれもない事實である。その功績に、没すべからざるもののあることもまたたしかである。極言すれば、丘長春以後にものされた全眞教關係のほとんどすべての資料が、筆をそろえてその功業をたたえているのは、まさにその反映である。至元辯僞録が、口をきわめて丘長春を攻撃するのをもまた、その一證となるであろう。丘長春の西遊以後、教團勢力は貴賤上下を問わず伸展し、一時は當時の宗教界を風靡するような勢いさえも示した。「佐玄寂照大師馮公道行碑

銘」に

長春仙去。公——馮志亨——謂清和真人——尹志平——曰。道教之興。自開闢以來。未有今日之盛。<sup>(14)</sup>  
とあり、「眞常子李真人碑銘」のなかに

(七真人の名を列ねたのち) 厥後。學者徧天下。無慮數千萬人。而習他教者爲衰。嗚呼盛哉。<sup>(15)</sup>

とみえるのは、溢美の言であるにしても、その伸展の有様のめざましかつたことを物語る一證となるであろう。しかし、だからといって、丘長春を七真人中の隨一の道士と推すわけにはいかないのではなからうか。その言動から推察するに、政治的手腕という點では、たしかに七真人の隨一といえるであらうけれども、教理の形成や教團勢力の基礎の確立にじみな努力を傾けたという點においては、馬丹陽に一步をゆづるように思われる。<sup>(16)</sup> いずれにしても、王重陽のなきあと、七真人がおのがじし各自の特性を發揮して教團形成につとめた結果が、集約的に丘長春およびそののちのころに實をむすんだのであるから、その甲乙をあげつらう必要はあるまいと思われる。

金鱗の詩を師の王重陽から贈られてその弟子となつた丘長春は、相前後して同門の弟子となつた馬丹陽や譚長真たちとともに、王重陽の死去するまで師の許にあつて、きびしい教えをうけた。王重陽は弟子たちをひきいて、大定八年二月には崑崙山の煙霞洞にこもり、同年八月には文登の姜實庵(姜心庵とも傳えられている)に移つた。翌年四月には寧海の金蓮堂に、九月には福山、登州をへて萊州に赴いた。長生子劉處玄が入門したのはこのときである。十月には掖縣をへて開封にいたつて磁器王氏の旅邸に入り、翌十年(一一七〇)一月四日に歿した。従つて丘長春が王重陽の教えをうけたのは、わずかに二年四ヵ月の短時日にすぎなかつたのである。七真人のうちでも最年少であつたかれが、いかに道門の神器であり、片時も師の傍をはなれなかつたとはいうものの、かかる短時日では、道の奥義を會得でき

なかつたのは當然のことであろう。歴世眞仙體道通繼續編卷一の王重陽傳および七眞年譜大定十年の條にみえる、王重陽が死にのぞんで

丹陽已得道。長眞已知道。吾無慮矣。處機所學。一聽丹陽。處玄長眞當管領之。

とのべた言葉は、その明證であろう。すでに得道の域に達していた馬丹陽に指導を仰ぐように命じているためである。かれの修行にのぞいた年月が七眞人中もつとも永かつたことも、あるいは未成道の程度を物語る一證となるかもしれない。

なお、のちに訂正されたが、吉岡義豊氏は、はじめ右にかかげた王重陽の臨終の言葉の最後句を、「處玄、長眞まさに之を管領すべし」とよまれた<sup>(17)</sup>。すると、「之」は長春をさし、處玄と長眞の二人が長春を管領するいみとなる。すなわち、三人がかりで長春を指導することになる。ところが、「丹陽」と「長眞」は道號であり、「處機」と「處玄」は字である。だから、得道、知道したものと、然らざるものとのあいだに、はつきりした區別のつけられていることがわかる。とすれば、修道の程度がほぼ同じである當時の劉長生に、丘長春の管領を命ずる道理がない。長春・長春二人の修道程度がほぼ同列であつたことについては、丘長春の高弟である尹志平の清和真人北遊語錄卷一に

(祖師——重陽) 既得四師眞。復以弟姪子次之。丹陽爲弟。譚爲姪。長生長春則子也。<sup>(18)</sup>

とあることによつて明瞭である。さらに同書卷二には、右にひいた王重陽の遺言が

至正月四日。祖師臨昇。三師立牀下。祖師曰。丹陽已得道。長眞已知道。吾無慮矣。長生長春則猶未也。長春所學。當一聽丹陽命。長眞當管領長生。

と明記されている。これによるならば、誤解のおこる餘地はない。とにかく、王重陽は死にのぞんで、丘長春の指導

を馬丹陽に、劉長生の指導を譚長眞に、それぞれ命じたのである。

七眞年譜や甘水仙源錄卷一所收の全眞第二代丹陽抱一無爲真人馬宗師道行碑などによると、師の死去にあつた四哲<sup>(19)</sup>は、とりあえず師王重陽のなきがらを開封の孟宗獻の花圃に假埋葬したのち、陝西地方にいたつて、同門の法兄ともいふべき二、三の道士たちにあい、翌十一年には、王重陽がかつて止住して、山東に赴く際にみずから火を放つて焚いた劉蔣村の庵を再建して、その一隅に埋葬の場所をととのえた。翌十二年には長安で自然錢をつのつたのち開封にもどり、<sup>(21)</sup>王重陽の柩を負つてふたたび劉蔣村の庵にとつてかえして、禮をあつくして、さきにととのえた墓所に埋葬した。爾來、この庵を祖庵もしくは祖庭とよぶようになつたが、元代にはさらに修築の手が加えられて規模が大きくなり、大重陽萬壽宮とよばれるようになった。葬事をおわつたかれら四哲は、その中大定十四年(一二七四)中秋までのあしかけ三年間、師の墓側に侍して弟子の禮をつくしたという。全眞教が、儒教のとくところをいれていた一例とみることができよう。馬丹陽が、師の「嚮」という字にちなんで、頭髮を三髻にしていたのは、このときのことである。この間の丘長春の具體的な動靜はわからないが、おそらく馬丹陽の指示のもとに、他の二子同様師の墓を守るとともに、修道にいそしんでいたことと推測される。

三年の喪をおえた大定十四年中秋のある夜、馬丹陽以下の四哲は、秦渡鎮(陝西省鄠縣東)の眞武廟——のちの志道觀——において、おのおの志ざすところをのべあつて爾後の修道をちかい、その翌朝四方にわかれさつた。歴世眞仙體道通鑑續編卷一の馬丹陽の傳や七眞年譜大定十四年の條、金蓮正宗仙源像傳の丹陽子の條などには、その席上で、馬丹陽が鬪貧、譚長眞が鬪是、劉長生が鬪志といつたのに對して、丘長春は鬪問とのべたとみえている。四哲の志ざすところをみても、全眞教が從來の道教とはことなつた性格をもち、禪的傾向のつよかつたことがうかがわれるであ

らう。

他の三子の志についてはさておき、丘長春ののべた「鬪間」について一言しておきたい。「間」について、玄風慶會圖には、「間則無爲應緣。照面常寂」と説明している。<sup>(22)</sup> また一説によれば、「閑」に通じ、一切の妄念妄情を脱却して無爲であり、寂然としていることだという。この兩説はほぼ同意である。そうして、いわば禪的態度とも通ずるものが感ぜられる。この「閑」を従來からの道教用語で表現すれば、無爲清淨にあたるであろう。王重陽は、清淨であることを求道の根本態度とし、馬丹陽は丹陽真人語録のなかで、四六時中、天の運行が止まらないのと同じく、學道の人が晝夜をとわずつねに清淨であり、少しも雜念をおこさなかつたならば、修行は日に日に進み、ついに神仙（得道者）になることができるとのべている。<sup>(23)</sup> したがつて、「間」は求道者の根本的態度、いかえれば得道を志すもの前提となるべき心構えといふことができる。修道の點では四哲のうちでもつとも下位にあつたと思われる當時の丘長春が、はじめから道の奥義すなわち悟りの境地を目ざさずに、まず求道者としての根本的態度の會得を心がけたのは、まことに着實な態度であつて、いわゆる「道門の大器」たる素質をうかがわせるに十分な資料となるであろう。

七眞年譜によると、眞武廟でのおの志ざすところをのべあつたのち、馬丹陽は劉蔣村に、譚長眞と劉長生とが洛陽に赴いたのに對して、丘長春は磻溪（陝西省寶雞縣東南）にいつたとみえている。磻溪集卷一の冒頭は「秦川」、第二首目が「磻溪」と題する詩であるが、姚從吾氏はこの點にもとづいて、丘長春は西の方鳳翔に遊んで、虢州をへて、磻溪に隱居したけれども、これによつてかれが最適の地をえらんで修道しようとした志がわかるとのべている。おそらく、そのとおりであろう。「鬪間」の環境をつくる上からいつても、首肯できる。陝西通志卷十寶雞縣の條には、縣南二十里のところにある香巖の近くに、丘長春が修道したと傳えられている天真洞があるとみえている。おそらく、



この天真洞がかれの修行道場であり、磻溪集卷一の「磻溪鑿長春洞」と題する一詩の長春洞がこれにあたるのではないかと思われる。

丘長春は磻溪で爾後六年間修道に専念した。その修行は、かなりはげしいものであつたらしく、「長春真人本行碑」にはその間の有様を

師乃入磻溪穴居。日乞一食。行則一簑。雖簞瓢不置也。人謂之簑衣先生。晝夜不寐者六年。

とうつしている。王重陽は陝西地方で修道中、南時村に活死人の墓と名づける一穴をほり、そのなかに獨坐して修行したことがあつた。丘長春の穴居は、王重陽の場合のような地中にほられたものではなく岩窟を利用したのであろうが、おそらく獨り思いをこらすのに好都合なために、このような手段をとつたのであろう。あるいは、師の故智にならつたのかもしれない。一般に全真教では、多食を修道の害になるものとして排斥した。たとえば、尹志平は食睡色を修行の三害として、つぎのようにのべている。

師——尹志平——摘要訣誨之曰。修行之害。食睡色三欲爲重。多食即多睡。睡多情欲所由生。人莫不知。少能行之者。必欲制之。先減睡欲。日就月將則清。則在躬昏濁之氣自將不生。向上達者。率自此出。<sup>(24)</sup>

情欲、妄想、雜念をおこさないことが得道の第一段階であるから、そのもとになる多食や多睡をいましめるのは當然である。馬丹陽は、「睡眠亦是人之所欲。須要換。過則不是」<sup>(25)</sup>とのべている。そこで、さらに一步をすすめて睡眠を禁ずることが行なわれ、これを消陰魔もしくは煉陰魔と稱している。丘長春の場合は前掲の「長春真人本行碑」に記るされているが、類例はきわめて多い。<sup>(26)</sup>ただし、消陰魔を文字どおりまったく一睡もせず徹夜したいみにとるのは誤りで、結城令聞博士の示教によれば、横になつてねないことの由である。そうして、かかる修行は、今日の禪僧

のあいだでなお實行されていると、ある機會に一禪僧からきかされた。すると、あるいはこの消陰魔も、禪宗にならつた結果かもしれない。

開祖王重陽はみずからも人の意表にでるような突飛な荒行を行つたが、馬丹陽たち四哲に對する教導にも、ときに言語に絶するきびしいものがあつた。そのきびしさは、七真人をへて一般の教徒にまでおよんで、全眞教團の一特色とさえみられるようになった。丘長春は、磻溪にいた六年のあいだ一簑しか身につけていなかつたといわれているが、そのことについて、かれ自身、「寄道友。覓敗布故履。余在西鏡六年。未嘗一新衣履。每至中秋。唯完補褐衲耳」という序で一詩をよんでいる。曰く。

秋風忽起雨天涼 木葉蕭疎草漸黃

褐衲懸鶉唯關補 芒鞋伏兔不能狂

有身易着饑寒苦 無福難逃日月長

但願諸公懷惻隱 扶持同步入仙鄉<sup>(27)</sup>

もつて、丘長春の修道の心構えをうかがうにたろう。この態度は、馬丹陽の蓬頭垢面を恥じず、糲食麤衣を嫌わず、榮華富貴を羨ましがらず<sup>(28)</sup>、もしくは好衣をきることをえず、好飯を喫することをえずなどとのべているのと相通じ、<sup>(29)</sup>ともに外形にとらわれずに内實をたつとび、従來の道教にくらべれば、形而上的な面を重視する全眞教團の傾向を示すものと考えられる。

丘長春は、このような態度で磻溪で修行に専念すること六年、大定二十年（一一八〇）には隴州の龍門山（陝西省鹽縣西北）にうつつて、さらに七年の間、磻溪のときと同様の態度で修道にはげんだ。このころになると、かれの名は

しだいに各地に知られはじめ、その傍に侍する弟子たちもようやく數をました。一方、馬丹陽たちの苦心の結果、陝西地方において、全眞教の教團勢力はようやくまとまりはじめていた。そしてその組織や教勢の急激なび方は、金朝から疑いの目をもつてみられるほどであつたらしい。大定二十一年冬、道士をそれぞれその故郷にかえずという命が京兆府からでたのは、その結果と考えられる。その命によつてもつとも大きな打撃をうけたのは、當時ようやく教團としての體裁がとどのいはじめていた全眞教團であつたであろう。當時、王重陽なきあとをつぎ、教團の基盤確立のために努力を傾けていた中心人物の馬丹陽が、その本郷山東地方にかえらなければならなくなつたためである。けれどもその命にさからうわけにはいかず、馬丹陽は、關中の教團關係の後事を一切丘長春に托して、翌二十二年四月故郷にかへつた。

ところが、金蓮正宗記卷三の丹陽馬真人傳によれば、馬丹陽から關中の後事を托された丘長春自身もまた、京兆府からの命によつて郷里にかえらなければならぬ道士の一人となつていたようである。かれは、自分が故郷にかへつてしまえば、關中の全眞教の教團勢力は地をはらつてしまふであらうから、故郷にかえるわけにはいかないけれどもしばらく縁にしたがつて下山しようといつて、龍門山から下つた。ところが隴州の官民が一同そろつて歎願書を提出した結果、幸いにして認められて、ふたたび山上にもどることができた、とみえている。この事件は金蓮正宗記にのみかみえていないので、眞偽のほどはわからない。萬一、このことが事實であつたとするならば、當時すでに、隴州およびその附近においては丘長春の名と存在が大きくクローズアップされ、人々から尊崇されていたらしいこと、およびその政治的手腕にすぐれていたことなどの裏書となるであろう。

馬丹陽は山東にかへつた翌二十三年に歿し、同二十五年には王重陽から知道者とたたえられた譚長眞も死んだが、

丘長春は相變らず龍門山にあつて、自己の道念の完成にいそしんでいた。かれが成道、すなわち性命の奥義をさとることができたのは、譚長眞死去の翌年、大定二十六年（一一八六）のことであつた。闕間と眞武廟でのべてから、實に十三年後のことである。「長春眞人本行碑」には、そのころのことを「遠方學者咸依之」としたためているから、當時かれの聲威と學徳はひろく人々の認めるところとなつていたに相違ない。全眞教團としても、七眞人中馬丹陽、譚長眞および孫不二の三人がすでにこの世の人ではなかつたから、かれに期待するところははなはだ大きかつたわけである。そうしてかれは、その期待に十分にこたえる活動を開始したのである。

大定二十六年冬、かれは京兆統軍の夾谷公なるものに迎えられて、劉蔣村の祖庭に止住し、いよいよ教化にのりだすことになつた。このころには教團勢力は各地にのびて、七眞人の弟子たちもしだいに活躍をはじめていたが、翌二十七年には七眞人の一人の王玉陽が金の世宗の召しをうけて闕下にいたり、世宗の延生の理についての下問に對して、精をおしみ神を全くするのが修身の要訣であり、端拱無爲であるのが天下を治める根本であると答えて、世宗から嘉納された。こうして、全眞教團は金の帝室と結びつくことができ、このち大いに發展するもとがひらかれたが、その翌年には丘長春も召されることになつた。すなわち、かれの高名を耳にした世宗は、大定二十八年（一一八八）二月使を遣わして上京するように命じた。詔を奉じて丘長春が都燕京にいたると、世宗は二月十一日聖旨をもつてかれに萬春節（世宗の誕生日、三月一日）の醮をつかさどるように命じて、中袍を賜つた。そうして、謁見や下問に便利なように、有司に命じて萬寧宮の西に官廡をたて、丘長春を止住させることにした。王玉陽が天長觀（のちの白雲觀）におかれたのに比すれば格段の相違であつて、帝のかれに對する評價が高かつた由を示している。五月には長松島で世宗に謁し、七月にも再度召見されて、全眞教の至理を説明したところ、いたく帝の意に合して、その翌日上林苑の桃を

賜つた。かれは、ここ十數年間茶果を口にしていなかつたけれども、上賜の故をもつてその桃をたべたという。八月には世宗の許しをえて終南劉蔣村の祖庵にもどつたが、その折に下賜された錢十萬は上表して辭退したと、「長春眞人本行碑」にみえている。いかにかれが世宗の意になつたかが、明らかであろう。

磻溪集卷三にみえる世宗挽詞の引によると、世宗は萬春節の醮をつかさどらせるために丘長春を高功法師としたといふ。<sup>(30)</sup>全眞道士にして金朝から法師號を授けられた最初である。また四月二日には、聖旨を奉じて自分のいる官庵に呂純陽・王重陽・馬丹陽の三師の塑像をつくつたが、彩繪や供具などすべてが精備されたともみえている。こうして全眞教團は、金朝のいわば公認宗教という位置を獲得したのである。丘長春の世宗に召されたことによつて、爾後の教勢伸張のまたとない便宜がえられたのであるから、その功績は没すべからざるものといわなければならない。ここにも、かれのすぐれた政治的手腕が發揮されているとみることができよう。とにかく、金の世宗の末年には、教團發展のゆるぎない基礎がきづかれたのである。

世宗挽詞の引のなかには、「己酉年春。途經陝州。遽承哀詔」という一句がある。この一句が、世宗の再度の召しによつて上京の途上に世宗の死去の報をきいたといういみなのか、たまたま布教活動のための旅行中にその報をうけたというのか、その邊のことははつきりしない。けれども、丘長春が再度の召しをうけたという記述はたえてみえないので、おそらく後者のいみにとつてよいであろう。すると、劉蔣の祖庵にあつたころのかれは、しきりに各地に赴いて布教活動にしたがつていたにちがいない。かれが各地に活動すれば、おそらく入信するものが多かつたであろうから、關中の全眞教團はとみに活況を呈したとと推測される。

章宗の明昌二年（一一九二）十月、丘長春は龍門山を下つて以來數年間止住していた劉蔣の祖庵に別れをつけて、鄉

里の棲霞縣にかえつて規模の大きな道觀を建立し、そこに止住することにした。これをきいた章宗は、太虚觀という勅額を下賜したが、その規模は東方の道觀のなかでも冠たるものであつたと「長春真人本行碑」に記るされている。爾來、泰和七年（一一〇七）にいたるまでの間の丘長春の動靜は、太虚觀にあつた一事をのぞけば、諸書に記述がないのでつまびらかでない。けれども、推測するに、おそらくかれは山東各地の布教に努力を傾けるとともに、多くの弟子たちの教導につとめていたであらう。そうして、山東のみでなく、その近隣一帯はほとんど直接かれの勢力範圍となつていたに相違ない。また、かれの教導をうけた多くの弟子たちは、金朝治下一帯の地において熱心な布教活動を行なつていたから、いわゆる貞祐の南遷以前の金朝の領域内では、全眞教團は大きな力となつていたに相違ないと思われる。

泰和七年春、章宗の元妃李氏は宮中よりはるかに丘長春に禮して、道藏一部を下賜した。金蓮正宗記には玄都寶藏六千餘卷を賜つたと記るされているから、下賜された道藏は、章宗が明昌元年（一一九〇）に命を下して、北京の天長觀の住持孫明道に編纂させた大金玄都寶藏であらうと思われる。なお元妃李氏は、同時にそのころ聖水の玉虚觀にあつた王玉陽にも一部の道藏を下賜した。金朝より道藏の下賜をうけたのは丘長春と王玉陽の二人しかないので、當時の全眞教團の勢力や金朝との結びつきの密なることなどがおしはかられるであらう。「長春真人本行碑」には、道藏下賜の記述につづいて、丘長春を敬奉する達官貴人が日に日に多くなり、定海軍節度使の劉師魯や都應中のような名臣までが、かれと友人となつたと記るされている。従つてその交友範圍が大幅にひろまつていたらしいことがうかがわれる。と同時に、かれの名は、多くの人々のあいだでは、おそらく一種の救世主的な響きをもつて語られていたのではないかと思われる。

これまでのところでは、その間に多少のつまづきはあつたにもせよ、全眞教はその教團勢力を順調にのばしてきた。このまま何事もなく金朝がつづいていたならば、丘長春や全眞教團にも飛躍的な變化はなかつたであろうが、のちに大きくその運命や教勢を左右する原因となつた戦雲が、漠北の地方にしだいにこくみなぎりはじめたのは、あたかも丘長春らに道藏が下賜されたところからのことであつた。

### 三 チンギズハンの招き

外モンゴルのオノン、ケルレン兩河の流域を故土としていたモンゴル部族の勢力は、一世の英傑とたたえられたテムチンがあらわれるにおよんで、急激に膨脹した。テムチンが、モンゴル部の社會機構を再編成して、モンゴル諸部族の大半をその傘下におさめ、遊牧的封建制ともよばれるような制度を確立したのち、オノン河畔のクリルタイで大汗に推されて、チンギズハンのという稱號をおくられたのは、丘長春が金の章宗の元妃李氏から道藏を下賜される前年、すなわち泰和六年（一一〇六）に相當するときのことであつた。

チンギズハンは、大汗に推される前年、すぐれた機動力をもつ騎兵集團をひきいて第一回の西夏侵略を行なつた。そののち、西夏が、そのときの和議の條件であつた貢物を約のごとくにいれないということをお口實として、第二、第三回の侵略を行なつて、ついに西夏を服屬させてしまつた。そうして、さらに南下して金に迫つたのである。當時の金は、建國以來すでに百年にちかく、しかも華北の農耕地帯に定住生活をつづけていたために、中國の文化の影響をふかくうけて女眞民族固有の質實剛健な氣風をまつたく失なつていた。小堯舜とよばれた世宗がこの點をうれえて、固有の民俗や國語を重んじて、女眞人の中國化を阻止しようとしたが、結局徒勞に終つたことは、そのよい例證であ

る。その上、兵力は弱體化し、税制や幣制の上でも失策をかさねて經濟界が混亂していたので、その國力はとうてい昔日の比ではなかつた。それに加えて、しばしば治下の漢人の亂があつたので、いささか誇張していえば、收拾のつかない状態であつたわけである。漢人の亂がおこつたのは、おそらくかれらのあいだに、金朝に對する不滿がみなぎつていたためのように推測される。このような國內状態で北方からのモンゴル軍の強壓を支えなければならなかつた當時の金は、末期のころの遼とほとんど軌を一にしている感がある。

従つて新興の意氣さかんなモンゴル騎兵隊の前にはとうてい敵ではなく、またたく間に河北、河東の地を奪われ、しかも領内には契丹人の亂がおこつたので、大混亂に陥り、首都燕京は陥落寸前という有様におこまれた。内外の情勢の非なのをみた金の宣宗はやむなく和を請い、ようやく一時の難をのがれた。モンゴル軍の引上げたあと、黄河以北で金領として残されたのが燕京附近だけとなつた金では、モンゴルの再侵入をうけた場合、首都を守り切れないのではないかと案じて、一部の反對説をおしきつて、汴京開封府への遷都を實行した。ときに貞祐二年（一一二四）。いわゆる貞祐の南遷である。これを知つたチンギズ・ハンは、この遷都をもつてモンゴルに對する不誠意のあらわれとして、ふたたび南侵の兵をおこし、貞祐三年（一一二五）燕京を陥れて、河北地方をすべてその勢力下に收めてしまつた。こうして金は、黄河以南、淮水以北のごくせまい領域内にとちこめられて、滅亡寸前の状態におちこんだ。

從來、つねに金の壓迫に苦しんでいた南宋は、このような金の衰退をみ、この機に乗じて北方地域を回復すべく、寧宗のときに戦いを宣して北伐の軍をむけたけれども、國論の不統一のためにはかばかしい成果を収めることができず、結局和を講じて兵をおさめた。泰和六年のことである。その講和の條件は、金に有利のようにはみえた。しかし、金の國家財政は打ちつづく戦亂のために窮迫をつけ、領域内での穀倉地帯である山東地方に過重な經濟的負擔をかけ



ることになつた。その結果、山東地方には盜賊が横行することになつて、有利らしくみえた宋に對する和の條件も、ふたをあけてみれば決して有利ではなかつたわけである。なお、金では章宗の中期以後、北宋と同じく、度牒、紫衣、大師號のほか、寺院道觀の勅額まで官賣するようになった。これは、國家財政の窮迫を打開する一策として、宗教々團のもつ財産に目をつけて、これを利用しようとした結果である。あるいは、このような金朝の經濟政策は、全眞教團の勢力發展に一役を買つてゐるように思われる。

その上に、各地に反亂があいついでおり、河南地方では食糧問題にまつる紛争が生じて、物價は騰貴する一方であつた。このような金の國內状態をきき知つた南宋は、さきの和約の條件である歲幣をおくることを拒否した。そこで金は、モンゴルの侵入によつて北方において失つたところを南方においてとりもどし、あわせて南宋からの歲幣を回復しようと考えて、貞祐五年（一二二七）伐宋の兵をおこした。ところが案に相違して、伐宋軍は宋軍に敗れ去つた。その結果、西からは西夏、北からはモンゴル、南からは南宋と、三方から攻撃をうける破目におちいり、わずかに保有する河南、山東の地方では、誅求にたえかねた農民の蜂起があるなど、まさに文字どおり内憂外患ともごもいたるという状態となつて、國內は混亂そのものと化しさつてしまつた。こうして女眞帝國金朝の挽歌は、しだいにその響きが高くなつていつたのである。

金の國內がこのような状態に陥つていたときに、丘長春はどうしていたであらうか。諸書にほとんど記載がないので、くわしいことはわからない。ただ、歴世眞仙體道通鑑續編には、大安元年（一二〇九）に學仙記を、同二年に開天記をつくつたとあり、七眞年譜には大安元年に鼇山に遊んで詩二十首をつくり、貞祐二年（一二二四）には崑崙山煙霞洞に遊んで詩を賦したと記し、磻溪集には各地で醮を行なつた由の詩が掲げられているから、泰和七年以前と同様、

あるいは大虚觀内において著述にしたがい、あるいは人々の請いにまかせて各地に赴いて醮を行なつて祈福消災し、または道を講じて弟子を導きながら、靜かに金朝の將來をみつめつつ教團の前途を考えていたに相違ない。

全真教においては、後述するように、眞功・眞行という自利・利他の二門がたてられていて、この二門を兼ね修めたものでなければ得道者とみないのであるから、全真道士はみなこの二門をつむことに努力した。眞行とは、病人をすくい、俘虜をあがない、あるいは人々の苦しみをのぞくことなどである。従つて、金末の混亂した社會において苦しむ人々は、全真道士にとつては、まさに格好な眞行の對象であつたわけである。このようなみ方からすれば、丘長春たちはこの好機をのがさず、大いに眞行を行なつていたに相違ない。そうして一般の人々からみれば、丘長春を始めとする全真道士の行動は、いわば自分たちの味方として苦しみや惱みを救つてくれる人として映じたであろう。そこで人々は、かれら全真道士の言に好意をもち、入信するものも少なくなかつたであろう。當時全真道士たちの統率者的立場におかれていた丘長春は、人々からみれば、いわば救世主にちかいものと感ぜられたにちがいない。その結果、丘長春の聲威はいやが上にもたかまり、その言葉には何人でも服すようになつていたように思われる。

「長春真人本行碑」には、貞祐二年の秋、山東地方が亂れたので統軍安撫使の僕散安貞が討伐したが、登州と寧海地區だけは平定することができなかつた。そこで安貞は丘長春に撫諭を依頼したところ、いたるところみな干戈をなげすめて長春の命にしたがい、その結果二州がようやく平定された、と記るされている。金蓮正宗仙源像傳には、「貞祐二年甲戌冬。山東亂。帥府請師牒諭。所至皆投戈拜命」とうつしているから、丘長春は自身で撫諭したのではなく、一筆認めて、それを安貞がもつて人々を説いたのであろう。また西遊記卷上には、丘長春がチンギズ・ハンの招きに應じて西遊の途にのぼつた際、居庸關の北で盜賊の一群に襲われたが、その盜賊たちは丘長春だと知ると、「無

驚師父」といつて退いたという話がつていゝ。この話が事實とすれば、山東地方ばかりでなく、遠く現在の蒙疆地方にまで、その名と高德が知られて、人々から慕われていたことになる。おそらくかれは、當時の人々から、道俗貴賤を問わず、尊崇されていたにちがいない。安貞の依頼はそのよい例とならう。

金蓮正宗仙源像傳には、貞祐四年（二二六）金の宣宗が東平監軍の王庭玉に命じて丘長春を招いたが、かれはその命に従わなかつたとみえている。七眞年譜には、そのときかれは、「我循天理而行。天使我行處無敢違也」といつて斷つたと記してある。金朝ではなおも丘長春の招聘をあきらめず、興定三年（二二九）四月、當時萊州の昊天觀にあつたかれを河南提控邊鄙使をして召させたけれども、やはり失敗に終つた。なお西遊記卷上には、興定二年以前に「河南屢欲遣使徵聘。事有齟齬。遂已。（中略）復有使。自大梁來。道聞山東爲宋人所據。乃還」とあるから、金朝からの招きは前にあげた二回のみではなかつたらしい。

一方南宋でも丘長春の名を知り、嘉定十二年（二二九、金興定三年）六月金の元帥張林が山東地方の十二州をもつて來降したのを機會に、同年八月江南大帥の李全や彭義斌を遣わして召したが、長春はやはり赴かなかつた。西遊記卷上には、この記事につづいて、そののち隨處から往々招聘があつたけれども長春がすべて斷つたので、「萊之王者」がそのことを非難すると、長春は「我之行止。天也。非若輩所及知。當有留不住時」とのべたとみえている。けれどもこの言は、前にかかげた王庭玉のさそいを斷つた言葉とともに、どうもモンゴルすなわちチンギズ汗の招きを意識して記るされているような感じがするので、おそらく後人の加筆ではなからうか。

金史卷十四によると、金の宣宗は貞祐三年十月孔元措を召して太常博士に任じたが、それは孔元措が孔子の後裔であるところから、かれに孔子を奉祀させ、その威力によつて山東地方を横行する盜賊を絶滅させようとする目的であ

つたという。このことから、金朝がしきりに丘長春を招いたのも、あるいはかれのもつ道術によつて金朝の延命を計ろうとした結果ではないかとも類推される。けれども、南宋すら同様に招聘の擧にでているのであるから、私は金宋ともに、丘長春のもつ聲威、人々のかれに對する歸依尊崇を利用して人心收攬の手段にしようとしたのではないかと考えている。と同時にこのことは、當時の全眞教團の大きな教團勢力の裏書にもなるのではなからうか。

山東半島の一角において、金宋兩國からの招きを斷わりつづけて時勢をながめていた丘長春は、興定三年十二月、すなわち季全らを通じての南宋からの招きを斷つた四ヵ月後、チンギズ・ハンからの使者劉仲祿がくると、従前の態度を改めて、その召しに應じた。その理由を知るためには、まず劉仲祿來訪の經過を明らかにしなければならぬ。

西遊記卷上によると、チンギズ・ハンより丘長春招致の命をうけた近侍の劉仲祿は、興定三年五月、當時ナイマン地方におかれていたチンギズ・ハンのオルダを出發して、八月燕京に到着した。意外に早いのは、金虎符をもつていたためである。燕京についてその地の道士たちに丘長春の居處を尋ねたけれどもはつきりしなかつたので、その所在をさがしつつ中山から眞定（河北省正定）にいつたとき、はじめて萊州にいるらしいという風聞を耳にした。ついで、益都府安撫司官の吳燕や蔣元にあつて、ようやくくわしい様子をきくことができた。當時、山東地方は治安が亂れて盜賊が横行していたから、萬一をおそれた劉仲祿が、五千の兵をひきいて萊州へいこうとしたところ、吳燕たちは、「いまこの地方の人々は、宋とモンゴルとの和がなつたときいて一安心しているところである。そこへ突然大兵をひきつれていけば、人々はきつと戦争だと誤認して、險塞にたてこもつて自衛するであろうし、丘長春もまた舟にのつて行方をくまらずかもしれないから、かえつて目的を達成することはできまい」といさめた。劉仲祿はかれらの言にしたがつて、ぜひいきたいと願うものをつつて二十人を入れたので、それらのものだけをつれて益都にむけて出發し

た。

益都に到着する前に、あらかじめ吳燕たちを通じて益都副帥の張林に連絡させたところ、張林は金から宋に降つて半年ばかりにしかなつていなかつたので疑心もち、約一萬騎の武裝兵をひきいて益都城外まで迎えにきた。これを見た劉仲祿が、笑いながらおだやかに、ここを通るのは長春眞人を迎えるためなのに、なぜ君は武裝兵を林のようにつれてきたのだという、張林も疑いをして部下を解散させたのち、親しく劉仲祿と轡をならべて益都に入つた。<sup>(32)</sup>

當時益都には、丘長春の高弟李志常がいた。李志常は、のちに法兄尹志平について全眞教團の統率者となり、教團勢力の伸張に與つて力のあつた道士である。至元辯僞録が、口をきわめてかれを攻撃するのは、教勢擴張に大いに力があつたためにほかならない。かれは劉仲祿の使命をきいて大いに喜び、師長春はいま「海上」におられるが、この「盛事」を成就させるためには、せひともまず濰陽の玉清觀にいる法兄尹志平に會わなければならないと告げる一方、反服つねなき張林が劉仲祿の一行を阻滯させることをおそれて張林に説き、一行を衛送させることにした。<sup>(33)</sup>

劉仲祿は李志常の言にしたがい、張林の兵の衛送をうけて濰陽の玉清觀に赴いて、尹志平に面會した。尹志平は、丘長春門下の逸材で、郝太古から易を、王玉陽から籙法を傳授され、當時からすでに丘長春の後繼者として一般から認められていた道士である。劉仲祿からチンギズ・ハンの詔の趣きをきいたかれは、大いに喜んで、「將以斯道覺斯民。今其時矣」といつて、劉仲祿に同行して萊州の丘長春のもとに到つた。以上が、劉仲祿の丘長春のもとを訪れた大體の経過である。<sup>(34)</sup>

萊州の昊天觀に止住していた丘長春が、劉仲祿の使命をきいたときの態度については、大半の資料が使命をきくとすぐに召しに應ずる決意をしたかのようにのべている。なかでも元史卷二〇二には、劉仲祿がくる前日、丘長春が

「天使來召我。我當往」といつたとみえている。もし事實とするならば、丘長春が豫察の能力をもつていたことにもなるが、元史の編者が、丘長春がかかる能力をもつていたと記るしてあつた資料を無批判にとりいれたまでにすぎまい。元史釋老傳には往々誤つた記事がある上に、前後の事情から考えて、無稽のことと思われるからである。<sup>(35)</sup>それとはにかく、諸書に記るされた丘長春の態度は、果して事實であつたであろうか。もし事實とするならば、屢次および金宋兩國からの招きには耳をもかさず、途も遠く言語も通じないモンゴルからの招きに直ちに應じたのは、そこに何らかの特別な理由がなければならぬ。その特別な理由については、佐中壯氏に説がある。そこでまず、佐中氏の説に耳を傾けよう。

佐中氏は、丘長春を起たしめたのは結局時代の要求が然らしめたものだといふ前提にたたれる。そうして、丘長春の西遊は表面的には、チンギズハンの拒みがたい強要によるようにみえるけれども、實はそうではない。實はかれ長春自身、ある重大な目的をもつていたためである。もつとも、かれが西遊を決意するようになった理由、あるいは目的を明示した記事は、「元史の丘處機傳中にも、輟耕錄の丘真人傳中にも、又長春真人西遊記中にも見當らない」が、元史卷二〇二に

時國兵踐蹂中原。河南北尤甚。民罹俘戮無所逃。命處機還燕。使其徒持牒。招求於戰伐之餘。由是。爲人奴者。得復爲良。與濱死而得更生者。毋慮二三萬人。中州人。至今稱道之。

とあり、西遊記に收められている

十年兵火萬民愁 千萬中無一二留

去歲幸逢慈詔下 今春須合冒寒遊

不辭嶺北三千里 仍念山東二百州

窮急漏誅殘喘在 早教身命得消憂

という一詩、およびチンギズⅡハンにむかつて天が生を愛し殺をにくむ由を説いたことなどを考えあわせれば、丘長春西遊の目的が、「成吉思汗を動かして蒙古人の殺戮を禁止させ、以て同胞の危難を救う」ためであつたことは「明白なる事實」である、と。佐中氏の説を簡単に要約すれば、モンゴルの殺戮をやめさせて、中國人の生命を救おうとするのが、長春西遊の目的であつた、というわけである。なお、姚從吾氏も佐中氏の説にちかく、丘長春は金元時代において中華民族と中原文化の保全に大いに貢献したという。けれども、佐中氏の推測されるところが、丘長春としての西遊の眞の目的であつたであろうか。かれは全眞道士、しかも當時教團の統率者の地位にあつた道士である。佐中氏は道藏もしくは教團關係の資料を使用されないが、かれが全眞道士である以上、その西遊の目的を考えるためには全眞教の教理を一應知る必要がある。そこで、つぎに節をあらためて、全眞教の教理、就中修行と關連させつつ、「西遊」について考えてみることにしよう。

#### 四 全眞教の教理と西遊の動機

前にものべたように、全眞教の根本儀は性命の奧義を悟ること、佛教的にいえば、悟りの境地に達することであつた。禪の根本は、本來の面目、自己自身に相見するところにおかれては、全眞教もほぼ同様な立場をとり、自己自身に相見しえた境地を「長生」と名づけ、その境地に到達したものを「真人」、「神仙」とよんだのである。「長生」をうることに、すなわち性命を探求するためには、さまざま修行をしなければならぬが、その修行は内外の二門に

わけられて、眞功・眞行と名づけられている。重陽教化集卷三所收の「三州五會化緣榜」には、晋真人語録をひいて、眞功・眞行をつぎのように説明している。

晋真人云。若要眞功者。須是澄心定意。打疊神情。無動無作。眞清眞靜。抱元守一。存神固氣。乃眞功也。若要眞行者。須是修仁蘊德。濟貧救苦。見人患難。常行拯救之心。或化誘善人入道修行。所行之事。先人後己。與萬物無私。乃眞行也。<sup>36</sup>

また、終南山祖庭仙眞内傳の于善慶傳には簡潔に

修身養性爲功。立觀度人爲行。

とみえている。これらの記述によると、眞功とは自己の修行で、佛家の自利の門にあたることになる。佛家の説によれば、自利は自行ともいい、自己の宗教的向上のためにする修行であり、自己に利益をうるために自利とよぶ由である。だから右の重陽教化集や于善慶傳にいう眞功は、単に字句が異なっているだけであつて、その意義は自利とほとんどえらぶところがない。全眞教では、眞行を修めるためには、まず一切の念慮を斷たなければならないとされていゝた。重陽教化集卷二の「化丹陽」と題する一詞には

凡人修道。先須依此一十二箇字。斷酒色財氣。攀緣愛念。憂愁思慮。

とあり、重陽真人金關玉鎖訣には

先須持戒清靜。忍辱慈悲。實善斷除十惡。行方便。救度一切衆生。忠君王。孝敬父母師資。此是修行之法。然後習眞功。<sup>37</sup>

とみえている。一切の念慮をたち、眞功を習うためにとられた方法が、山中もしくは市井に隠れ、食を減じ、あるい



は消陰魔と稱する睡眠の禁などであつた。王重陽が活死人の墓に獨坐し、丘長春が磻溪の長春洞にこもつたのもそのあらわれであり、王重陽が馬・譚・丘の三人をつれて崑崙山煙霞洞にいつたのもその一例である。しかし、もつとも一般的にひろく行なわれたのは、打坐すなわち坐禪であつた。

禪宗における打坐の目的は、一切の妄念雜慮を止めて、自己の本性を徹見するところにおかれている。重陽の立教十五論第七條の論打坐には

凡打坐者。非言形體端然。瞑目合眼。此是假坐也。眞坐者。須要十二時辰。住行坐臥。一切動靜中間。心如泰山。不動不搖。把斷四門。眼耳口鼻。不令外景入內。但有絲毫動靜思念。卽不名靜坐。能如此者。雖身處於塵世。名已列於仙位。不須遠參他人。便是身內賢聖。百年功滿。脫殼登眞。一粒丹成。神遊八表。

とあつて、その目的が「百年功滿。脫殼登眞。一粒丹成。神遊八表」するところにおかれてゐる點をのぞけば、形體、精神とも、全眞教の打坐が禪のそれに酷似していることは明らかである。

第二の眞行は、人を救い世を救う外修である。清和眞人北遊語錄卷二には、「弘揚教法。接物利生。行也」と説明している。佛家では、利他とは、化他ともいうように、他人に功德利益を施すこと、あるいは迷界の衆生を救済すること、他者を化益するとの意義をもつと説いている。従つて、全眞教の眞行は佛家の利他に相當するのである。そこで、病氣を治すこと、俘虜をあがなつて良民とし、饑餓や兵亂などの苦惱から人々を救うことも眞行であれば、王重陽が七眞人を教化したのも眞行である。道觀を造立し、人々を入信させること、いいかえれば教團勢力を擴張することは大きな眞行である。なかでも一般によく行なわれたのが、醮と名づける祈禱の祭祀であつた。その行なわれた回数や種類は枚擧にいとまがないともいえるほど多いが、ここでは具體例をあげるのははぶいておく。

佛家においては、自利の目的を達したのちには利他を行なわねばならないと定め、自利行のみあつて利他行をかくものを聲聞、緣覺、兩行を具備するもの、すなわち自利利他圓滿のものを佛、菩薩という由である。この點は全眞教においても同様であつて、眞功を修めたのちに眞行に努力するようにすすめ、眞功を修めただけでは眞の道士、すなわち得道者ではないという。たとえば、晋真人語録には

先生曰。若人修行養命。先須積行累功。有功無行。道果難成。功行兩全。是謂真人。

とあり、全眞第二代丹陽抱一無爲真人馬宗師道行碑には

(馬丹陽)謂劉眞一曰。汝等欲作神仙。須要積功累行。縱遇千魔百難。慎勿退惰。果爾。然後知吾言不妄矣。

とのべた馬丹陽の言をのせ、清和真人北遊語錄卷二には

功行既至。道乃自得。若有心以求。則妄矣。

とあり、同書卷四には

若果功行周全。聖賢自來提挈。

とあり、また

外修陰德。內固精神。故知。雖有精神。不得功行。終不可成道。

ともみえている。ここにいう「真人」、「神仙」がいわゆる「仙人」ではなく、「得道者」をいみすることは、くりかえすまでもない。立教十五論の第十二條論聖道には功行二修と「神仙」との関係について、つぎのようにのべている。

入聖之道。須是苦志多年。積功累行。高明之士。賢達之流。方可入聖之道也。身居一室之中。性滿乾坤。普天聖衆。默默護持。無極仙君。冥冥圍遶。名集紫府。位列仙階。形且寄於塵中。心已明於物外矣。

清和真人北遊語錄卷三には、「一切功行。皆是求道之資」と記るされている。そこで全眞道士は、眞の道士、いわゆる「神仙」になるために大いに積功累行に努力を重ねたのであつた。

全眞教でとく内外二修を考えてここに至れば、丘長春の西遊が、「成吉思汗を動かして蒙古人の殺戮を禁止させ、以て同胞の危難を救うことのみを目的としたものであつたとみる佐中氏の説は、一應再検討をしなければならぬ餘地がでてきたように思われる。

「蒙古人の殺戮を禁止」することは、立派な眞行である。従つて、丘長春がチンギズ・ハンに見えて「殺戮を禁止」することができれば、また一つ大きな眞行をつむことになる。そこでかれの心中に、このような考えのあつたであろうことは、想像できる。けれども、當時の丘長春が心中もつとも苦慮していたであろう問題は、前述のような混乱した世にあつて、いかにして全眞教團を維持し存続させるかという方策であつたのではなからうか。かれは當時としては、ただ一人のこされた開祖王重陽の直弟子であり、齢も七十歳をこえた教團隨一の長老であつた上に、教團の統率者という立場におかれていた。そのような位置におかれたかれとしては、自己の眞行よりも、教團を維持して王朝の交替期と豫測されるこの時期を切抜け、できればさらに發展させることが、もつとも重要な課題であり、責任でもあると感じていたであろう。劉仲祿がチンギズ・ハンの命をもたらしつたかれの許を訪れたのは、あたかもそのような苦慮のさなかにあたるときではなかつたらうか。

丘長春は、前にも一言したように、政治的手腕にすぐれた人物であつた。その上、年齢からいつても、當時のかれは人生經驗を大いにつんでいる。そのようなかれとしては、たとえ身を山東半島の一隅においていたにしても、時世の變遷や大勢のおもむくところについては、ほぼ豫測できたであろう。従つて、金・南宋・モンゴルの將來について

も、おそらくかれなりの豫見ができたにちがいない。西遊記卷上によると、他の多くの資料に記るすところに反して、劉仲祿がチンギズ・ハンの命の旨を傳えて西行を請うた折に、かれは躊躇したということである。この躊躇は何のための躊躇であつたらうか。ここにいささか臆測をたくましくしてみたい。

劉仲祿は、おそらく丘長春にあつた最初に、もたらしたチンギズ・ハンのつぎのような手詔を手渡すとともに、ねんごろに西行を請うたにちがいない。

天厭中原驕華。大極之性。朕居北野。嗜欲莫生之。情反朴還淳。去奢從儉。每一衣一食。與牛豎馬圉。共弊同饗。視民如赤子。養士若兄弟。謀素和恩素畜。練萬衆以身。人之先臨百陣。無念我之後。七載之中。成大業。六合之內爲一統。非朕之行有德。蓋金之政無恒。是以受天之祐。獲承至尊。南連趙宋。北接回紇。東夏西夷。悉稱臣佐。念。我單于國。千載百世以來。未之有也。然而任太守重治平。猶懼有闕。且夫剝舟剡楫。將欲濟江河也。聘賢選佐。將以安天下也。朕踐祚已來。勤心庶政。而三九之位。未見其人。訪聞。丘師先生體真履規。博物洽聞。探頤窮理。道冲德著。懷古君子之肅風。抱眞上人之雅操。久棲巖谷。藏身隱形。闡祖宗之遺化。坐致有道之士。雲集仙逕。莫可稱數。自干戈而後。伏知先生猶隱山東舊境。朕心仰懷無已。豈不聞渭水同車。茅廬三顧之事。奈何山川懸濶。有失躬迎之禮。朕但避位側身。齋戒沐浴。選差近侍官劉仲祿。備輕騎素車。不遠千里。謹邀先生。暫屈仙步。不以沙漠悠遠爲念。或以憂民當世之務。或以恤朕保身之術。朕親侍仙座。欽惟。先生將咳唾之餘。但授一言斯可矣。今者。聊發朕之微意。萬一明於詔章。誠望先生既著大道之端要。善無不應。亦豈違衆生之願哉。故茲詔示。惟宜知悉。五月初一日筆。<sup>(38)</sup>

この手詔を熟讀翫味しながら、丘長春は種々思いをめぐらしたことであろう。皇帝の心をつかむことが宗教教團の

維持存続もしくは發展にとつて必須の條件である由は、すでに金の世宗の場合で經驗済みであるかれにとつて、この手詔は、將來の全眞教團を發展させるきつかけをつくるためとしては、一應好ましいものと感ぜられたであろう。けれども、未知の長途の旅程の艱難に自己の老齡と健康がたえうるかどうかは、考えなければならぬところであつたろう。また、金・南宋の兩國と新興のモンゴルとの將來についての再検討も必要である。さらには、手詔を通じて感ぜられるチンギズハンの人物と實際のそれとの相違にも考慮をはらわなければなるまい。けれども、要は、右の手詔に應じてチンギズハンの許を訪れた場合に、果して自己の期待するがごとき結果がえられるかどうかという危懼が、問題の焦點であつたであろう。これらを綜合した結果が、西遊記にいう「躊躇」となつてあらわれたのではないかと推測される。従つて、もしこのときに一人の道士の斷固たる助言がなかつたならば、あるいは、後世「長春真人の西遊」としてひろく喧傳されるようになった西行は、實現しなかつたかもしれない。その一人の道士とは、劉仲祿に同行して、おそらく丘長春との會見の場に立會つたであろう尹志平である。

濼陽の玉清觀で劉仲祿にあい、手詔の旨をきいた尹志平が大いに喜んで、「將以斯道覺斯民。今其時矣」といつたことについては、すでにふれた。甘水仙源錄卷三所收の清和妙道廣化真人尹宗師碑銘并序（弋毅撰）は、そのときの有様をつぎのようにならしている。

語及詔旨。師——尹志平——大喜曰。將以斯道覺斯民。今其時矣。遂偕往。覲長春真人於萊州昊天觀。先是。金宋聘命交至。皆不應。至是師勸行。決計北上。

また秋澗先生大全文集卷五六所收の大元故清和妙道廣化真人玄門掌教大宗師尹公道行碑銘并序には

先是。金宋交聘。公——丘長春——堅臥不起。至是。師——尹志平——請由道其將行開化度人。今其時矣。長春爲肯首。決意北覲。

とみえている。これらの記述に従えば、丘長春の西遊は實に尹志平の勧めと助言とによつて實現したことになるが、おそらくこれらの記述は信ぜられてよいであろう。

尹志平ののべたという「開化度人」は、とりもなおさず、「弘揚教法」であり、「立觀度人」である。丘長春門下隨一の高足であつた尹志平としては、師長春と同じく、平素から教法の弘揚に心をくだいていたのである。かれは、劉仲祿にあつたときには五十歳の働きざかりであつたから、執々たる雄心にもえていたのである。従つて、手詔をみ、劉仲祿の話を耳にしたときには、まさに好機ござんなれという感じをいだいたにちがいない。だからこそ、劉仲祿に同行して師長春の許にいたり、師の躊躇をみて、右のように勸めて切言したのである。丘長春とても、氣持としては、尹志平とまつたく同じであつた。けれども、さすがに年長のこととて、尹志平よりは分別もあり、前にのべたように、思いめぐらすことも多かつた。だから、尹志平のように簡單には諾否をきめかねたのである。その折に耳に入つた、もつとも信頼する高弟尹志平の切言が、一身を犠牲にして將來における教團發展の礎石となる決意を固めさせ、西行にふみきさせたのであらうと考えられる。丘長春が西行の決意を躊躇した理由に、老齡や健康、もしくはモングルの將來をより一層確實に見通うそうとしたことがふくまれていたであらうことは、西遊の途上に二度までも——一度は燕京において、一度はバラガスンにおいて——老齡を口實としてチンギズハンの東歸をまつて謁見したと洩らしていることによつて裏書される。<sup>39)</sup>とにかく、丘長春がチンギズハンの招きに應ずる決意をした大體の経緯は、おそらくこのようなものであつたであらう。

それでは、かれの考えた西遊の目的はどこにおかれていたであろうか。右にひいた尹志平の師長春に對する切言と、丘長春の教團内における立場と位置や混乱している金國內の有様などを綜合して考えれば、前述のように、チンギズハンの心をつかんで教團の將來に對する保證をえ、もつて教團發展の基盤を確立するのがその第一の目的であつたことは、まず確實であろう。そうして、「蒙古人の殺戮を禁止」することも眞行の一であるから、この點も目的の一ではあつたかもしれないけれども、あくまでそれは副次的目的であつたように考えられる。すなわち私は、佐中氏の「蒙古人の殺戮を禁止」することをもつて西遊の唯一の目的とするみ方には賛同しがたいのである。

なおここで一つ附言しておきたいのは、吉岡義豊氏の

丘祖の後をついだ尹志平、李志常等の弟子たちも、自宗の盛衰を憂うる前に、民衆の安否に心を碎いていた、といえよう。<sup>(40)</sup>

という一句についてである。第一に、ある宗教教團に屬するものが、「自宗の盛衰を憂うる前に、民衆の安否に心」をくだくことは、常識的には考えることができない。とくに立教後數十年しか経過せず、混乱した世相のなかにおかれた教團の場合に、その首腦部の立場にあるものが自派の盛衰をよそに民衆の安否のみを心にかける道理がない。また、民衆の安否を心にかけること自體が、自派の盛衰を思うことにもつながるのではなからうか。第二に、尹志平や李志常の劉仲祿に對してとつた態度や言葉からみて、吉岡氏のようにいうことはできまい。ことに尹志平の躊躇する丘長春に對してのべた「開化度人。今其時矣」なる一言は、吉岡氏の推測の妥當でない由を示す鐵證といえるであろう。尹・李兩道士もまた、丘長春同様、教團の盛衰をつねに案じていたとすべきである。

梅崎諦道氏は、丘長春の胸中には重大な目的が秘められていたはずであるが、その西遊の目的を明示する記述は、

元史にも、輟耕錄にも、西遊記中にも見當らない。けれども

長春が如何に權門に媚びない人格者であつたとは云へ、新興國元の太祖成吉思汗の意にさからふことは、彼自身の爲にも、また全眞教の爲にも不利であることを考へてゐたであらうと思はれる。彼の西遊の一つの目的が全眞教發展の爲であつたと云ふことは考へられると思ふ。これを證する資料はないけれども、太祖の意に契つた長春は非常に厚遇せられてをり、それがやがて全眞教發展の爲の強固な地盤となつたことに注意すれば明らかであらう。

という。この推論は正しい。ただ、右に詳説したように、秋澗先生大全文集にみえる尹志平の言葉のような立派な資料があるのであるから、「これを證する資料はない」という一句には贊意を表しかねる。梅崎氏は、以前に發表された「長春門下雜考」と題する論文のなかの尹志平の條で、甘水仙源錄卷三所收の清和妙道廣化真人尹宗師碑銘并序を<sup>(41)</sup>ひいて、「長春の太祖訪問は尹志平によつて決定したといつても過言ではない」という卓見をのべている。ここまできづかれたのであるから、さらに秋澗先生大全文集所收の「尹公道行碑銘」、全眞教の眞行、および當時の教團の状態などを考えあわせたならば、おそらく、すでに早く卓説をだされたであらうと思われる。

姚從吾氏の態度は、約二十年前に「南宋初河北新道教考」と題する論文において陳垣氏がとつた態度と同様な基盤にたつものである。陳垣氏の見解に對する私見はすでに發表したので、姚氏の見解についてははぶくことにしたい。<sup>(42)</sup>

さて、尹志平の切なる助言によつて、自己の年齢や健康その他をかえりみず、西遊にふみきつた丘長春は、西遊記卷上によれば、興定四年（一二三〇）正月十八日、尹志平以下十八人の高弟をつれてチンギズハンの許へ<sup>(43)</sup>と志した。二月燕京についた丘長春は、前にもふれたように、チンギズハンの東歸のちに謁見すべく思いたち、つぎのよう



な上奏文を上つた。曰く

登州棲霞縣志道丘處機。近奉宣旨。遠召不才。海上居民。心皆恍惚。處機自念。謀生太拙。學道無成。辛苦萬端。老而不死。名雖播於諸國。道不加於衆人。內顧自傷。衷情誰測。前者。南京及宋國。屢召不從。今者。龍庭一呼。卽至何也。伏聞。皇帝天賜勇智。今古絕倫。道協威靈。華夷率服。是故。便欲投山竄海。不忍相違。且當冒雪衝霜。圖其一見。蓋聞。車駕只在桓撫之北。及到燕京。聽得車駕遙遠。不知其幾千里。風塵瀕洞。天氣蒼黃。老弱不堪。切恐。中途不能到。得假之皇帝所。則軍國之事。非己所能。道德之心。令人戒欲。悉爲難事。遂與宣差劉仲祿商議。不若。且在燕京德興府等處。盤桓住坐。先令人前去奏知。其劉仲祿不從。故不免自納奏帖。念處機肯來歸命。遠冒風霜。伏望。皇帝早下寬大之詔。詳其可否。兼同時四人出家。三人得道。惟處機虛得其名。顏色憔悴。形容枯槁。伏望聖裁。龍兒年三月日奏。<sup>(44)</sup>

一度西遊を決意して萊州の昊天觀を出發しながらも、途中でこのような上表文を上つた丘長春の眞意のほどはわからない。もちろん、老齡や長途の旅程の心配もあつたであらう。しかしその點は、すでに出發の折にわかつていることである。そうして、それを承知で萊州を出立したはずである。それなのに、燕京まできて今さらめかしく上表するのは、いささか合點がいかない。臆測するに、「西遊」の目的達成をより一層確實にするために打つた一種の方略ではなからうか。というのは、招いたチンギズ・ハンとしては、一日も早く會いたいと考えているにも拘らず、一度出發しながら途中で止まり、しかも東歸後にしてほしいなどといわれれば、焦慮の念にかられるのは必定である。従つて、チンギズ・ハンが本心から丘長春を招くつもりであるならば、右の上表に對する答えが否定的であるぐらいのことは、當然上表文執筆のときにすでに豫期されるところである。萬一、上表文の申出を肯定し、東歸後に謁見すると

いう答であつたならば、本心からの眞面目な招きでない上に、當然西遊の所期の目的も十分には果しえないという見當がつけられる。そこでこの上表は、この邊の見當づけと、チンギズ・ハンをじらせて自己をたかく賣りつける心理的效果をねらつた、さぐりの手段のように思われる。この上表文を上つたあと、答詔のくるのを待たずに燕京を出發しているのは、その證據となるであらう。かかる臆測は、私ひとりのうがちすぎた考えではあるまい。

右の上表文に對して、同年十月、左のような答詔が届いた。

成吉思皇帝勅。眞人丘師。省所奏。應召而來者具悉。惟師道踰三子。德重多方。命臣奉厥玄纁。馳傳訪諸滄海。時與願適。天不人違。兩朝屢召而弗行。單使一邀而肯起。謂朕天啓。所以身歸不辭暴露於風霜。自願跋涉於沙磧。書章來上。喜慰何言。軍國之事。非朕所期。道德之心。誠云可尙。朕以彼酋不遜。我伐用張軍旅。試臨邊陲底定。來從去背。寔力率之故。然久逸暫勞。冀心服而後已。於是載揚威德。略駐車徒重念。雲軒既發於蓬萊。鶴馭可遊於天竺。達磨東邁。元印法以傳心。老氏西行。或化胡而成道。顧川途之雖濶。瞻几杖以非遙。爰荅來章。可明朕意。秋暑。師比平安。好指不多及。

この勅書によつてチンギズ・ハンの眞意もわかり、西遊の目的が達成できらしい見通しがついたのであるから、まずは丘長春の策は成功したといふことができる。

なお、右の勅書のなかにある、「老氏西行。或化胡而成道」の一句は、いたく私の注意をひく。この一句が、化胡經にもとづく老子化胡説によつてゐることは、説明するまでもあるまい。化胡説および化胡經については、南北朝以來佛道兩教のあいだの論争の中心課題とされ、元初の佛道論争——吉岡氏のいわゆる至元佛道論争——の直接の動機もまた、全眞道士の化胡經の作製にあつた。化胡經が僞書であることは、いまさらここにいうまでもなく、明らかな事

實である。ところが、その説は、右の勅書によれば、意外にひろく一般に信ぜられていたように思われる。とくに、姚從吾氏や岩村忍氏の推測するように、この勅書が耶律楚材の筆になつたものとするならば、ますます興味がふかい。耶律楚材は金末元初の禪僧萬松行秀の弟子であり、西域で丘長春にあつたはじめは詩賦を應酬して親交をむすんだが、中途から悪意をいだいて交わりをたち、ついで全真教團に對しても反感をもつようになり、その著西遊録には、全真教に對する悪評が記るされている。元初の佛道論争の佛教側の立役者は萬松行秀の弟子たちであり、論争の顛末を記した唯一の資料ともいふべき至元辯僞錄の編者も、その法嗣の系統に屬するようである。辯僞錄のなかには、耶律楚材の西遊録中にみえる事例が引用されている。とすれば、耶律楚材は當然化胡説に反對の立場にたつ人であり、右の勅書のなかに「老氏西行。云云」などと記るす道理がないと思われる。とにかく、耶律楚材と右の勅書との關係、このころの化胡説の普及程度については、再考を加える必要があるのである。

ところで、右の勅書をえた丘長春は、決意を新たにして、途中いくたの艱難をへながらチンギズ<sup>(46)</sup>ハンのオルダに到着した。ときに金の宣宗の元光元年（一二三二）四月のことである。チンギズ<sup>(46)</sup>ハンは大いに喜び、早速席を設けてその遠行をねぎらつたが、第一に發した問は、「真人遠來。有何長生之藥。以資朕乎」であつた。これに對する丘長春の答えは、「有衛生之道。而無長生之藥」であつた。この答えの率直さと誠實さはかえつてチンギズ<sup>(46)</sup>ハンに好感を與え、初回の謁見の際にすでにその心をしつかりつかんだのである。そうして、帝から神仙とよばれるようになった。そのよび名決定のときの有様を、西遊記卷上はつぎのように傳えている。

上問鎮海曰。真人當何號。鎮海奏曰。有人尊之。曰師父者。真人者。曰神仙者。上曰。自今以往。可呼神仙。丘長春は前後三回到わたつて帝に謁見し、「至道」についてのべたが、その要をつまめば、敬天愛民、清心寡欲、無

爲清淨、戒色、戒不孝、養生、および天道の生を好み殺を惡むことなどにまどめることができる。<sup>(47)</sup>帝は大いに喜んで、その言葉を逐一侍臣にかきとめさせ、他に洩らしてはいけないとか、諸王や大臣たちに向つてお前たちも各々心に銘ぜよなどといつたという。約一年間チンギズハンの側近にあつた丘長春が、翌元光二年(一二三三)三月東歸を請うと、チンギズハンは牛馬などの下賜品を與えようとしたが、長春がすべて辭退したので、道門の賦税を一切免ずることに定めた。こうして帝の許を辭した丘長春は、正大元年(一二三四)三月あしかけ五年におよぶ大旅行を終えて燕京に歸還した。歸還の旅行中に、チンギズハンはオルダからしばしば丘長春に勅書を與えてその安否を問うたが、そのなかで、かれにモンゴル領内の漢地ならばその好むところに住んでよいという許可も與えている。燕京についたのちには燕京行省石抹感得不の請によつて天長觀に止住することになつたが、チンギズハンは正大四年(一二二七)に瓊華島に萬安宮をたてて丘長春に賜わり、天長觀を長春宮と改稱させ、天下に詔して出家善人をみな隸屬させた上金虎符を與えて道家のことは一切丘長春の處置に任せるとに定めた聖旨をだした。このようにして丘長春の西遊は、豫期以上の大成果を收めることができ、將來全眞教團が大いに教勢を擴張できる基盤を確立したのである。かかる大役を果した丘長春は正大四年八十歳をもつて死んだ。

ところで吉岡義豐氏は、出家善人をすべて丘長春に隸屬させたことについて、癸未年九月二十四日(一二三三)に發せられた聖旨のなかの「教天下應有底出家人都管著者。好的歹的。丘神仙奉到如此」<sup>(48)</sup>という一段を論據に、丘長春が「元の太祖の詔を受けて天下出家人、即ち釋道二教の總管となり、管下の出家人は差役、賦税を免ぜられた。(中略)一時的にせよ、佛教徒が丘長春真人の隸下におかれたことは、後の問題の發火點とも考えられる」とのべて、出家人を釋道の二家とし、それが元代の佛道論争の原因となつたように考えている。<sup>(49)</sup>けれども、「出家善人」を直ちに「釋

道二家」と考えることは、いささか早計ではなからうか。たしかに「出家善人」の文字のみからみれば、吉岡氏のようにも解釋することができる。けれども、西遊記卷下の丘長春が東歸を請うた際の原文には

上問通事阿里鮮曰。漢地神仙弟子多少。對曰。甚衆。神仙來時。德興府龍陽觀中。常見。官司催督差發。上謂曰。應千門下人悉令蠲免。仍賜聖旨文字一通。云云。

と、その「門人」だけが賦税を免除されたと明記されている。また正大四年五月二十五日に伝えられた勅旨にも、「天下出家善人」と記るされてはいるけれども、その後段に「道家事。一仰神仙處置」と明記されている。さらに至元辯僞錄卷四には、「獨免丘公門人科役。不及僧人及餘道衆。古無體例之事」と、著者祥邁が憤慨しているのである。萬一、長春が道釋兩家の總管となつたのであれば、全卷全眞教團や丘長春攻撃にみちている辯僞錄のことであるから、必ずやわずか一言でも言及したにちがいない。それが、一言も言及しないどころか、科役免除の恩典に浴したのは「丘公門人」のみだつたと憤慨しているのであるから、佛教におよばなかつたのはたしかな事實である。七眞年譜癸未（一二三三）の條には「俾掌管天下道門」とあつて、「出家人」とは記るされていない。従つて、「出家人」を直ちに「釋道二教」と解するわけにはいくまい。文字には「出家人」とあつても、そのいみは「道士」と解すべきである。従つて吉岡氏のように、丘長春が一時的にもせよ、佛教徒をその隸下においたために、それがのちの論争の發火點になつたと、兩者をむすびつけて解釋するのは困難であらう。もつとも、丘長春を統率者とする全眞教團がチンギズ・ハンと緊密に結びついたことは、のちの元代の論争の遠因にあたるわけであるから、あながち兩者のあいだの關係を無視することはできない。

さて佐中壯氏は、前掲のように西遊の目的を推測したのちにその效果に言及し、チンギズ・ハンに殺戮禁止令のよ

うなものはださせられなかつた上に、元史卷二〇二の文(前掲)の「由是」以下の部分は本来耶律楚材傳に入るべきものであつて、元史の編者が誤つて處機傳に編入してしまつたために、木に竹をついだやうなものになつたという。殺戮禁止令をださせるのが丘長春西遊の目的ではなかつたのであるから、その努力もしなければ、そのような禁止令がでる道理もない。ただし、西遊記卷下に

(癸未年七月)十有三日。宣差阿里鮮。欲往山東招諭。懇求與門弟子尹志平行。師——丘長春——曰。天意未許。雖往何益。阿里鮮再拜曰。若國王臨以大軍。生靈必遭殺戮。願師父一言垂慈。師良久曰。雖救之不得。猶愈於坐視其死也。乃令清和同往。卽付招諭書二副。

とみえているから、丘長春の力によつて多くの人命が救われた事實はあつたにちがいない。また全真教に入信すれば、賤民も良民となり、かつ死を免れることもできたやうである。<sup>(50)</sup>

つぎに元史卷二〇二の文章の問題であるが、私からいわせれば、必ずしも元史の編者の誤りとみないでもよいようである。おそらく元史卷二〇二の資料の一部分であつたと考えられる「長春宮碑銘」に、つぎのような一段がある。

(丘長春)癸未至燕。年七十六矣。而河之北南已殘。首鼠未平。而鼎魚方急。乃大闢玄門。遣人招求俘殺於戰伐之際。或一戴黃冠。而持其署牒。奴者必民。死賴以生者。無慮二三鉅萬人。<sup>(51)</sup>

同意の一段は「重陽成道宮記」にもみえる。

四五十年間。而天下之人。賴以存活者。與脫俘囚者。可勝計耶。<sup>(52)</sup>

西遊記卷上にも、「凡士馬所至。奉道弟子。以師與之名。往往脫欲兵之禍。師之道蔭。及人如此」とあるから、して元史編者の誤りとする必要もなければ、耶律楚材傳に入れる必要もない。丘長春の力によつて人命が救われた事

例も多いのであるから、元史の記事はそのままよいと考えられる。

## 五　む　す　び

以上、全眞教の開祖王重陽の七人の高弟、いわゆる全眞教の七真人の一人である丘長春の略傳を紹介し、一般に「長春の西遊」といわれている、西征中のモンゴルの太祖チンギズ汗の招きに應じて中央アジアに赴いた動機とその顛末について、二、三の先人の見解を論評しつつ、私見をのべた。「西遊」の動機は、私見によれば、王朝交替期とみられる混亂した世にあつて、將來性のあると思われたモンゴルの朝廷と密接な關係をむすんで、全眞教團の維持および將來の發展に對する基盤を確立しようと目論んだ政治性のものであつた。老齡の丘長春をして長途の旅行にでる決意にふみさらせたのは、その高弟尹志平であつたと思われるから、「西遊」についてのその功績は、すこぶるたかく評價しなければならぬ。しかもその「西遊」は、丘長春の天下の道教の總管、全眞教團關係の賦税免除という、豫期すらしなかつたような大成を收め、元初における教團勢力發展の確固たる基盤を確立することができた。従つて、「長春の西遊」は、元代全眞教團膨脹の大きな原因の一つであつて、全眞教團史上「新紀元」を畫した重要な事件としなければならぬのである。けれども、一般的に中國の道教に關する研究がさほど進んでいない關係から、この「西遊」についても、全眞教の教理を通しての、もしくはそれとの關連に對する研究が、從來まつたく行なわれていなかつた。本稿においては、つとめてそのような觀點からみることに努力したつもりではあるけれども、私の全眞教の教理に對する研究がきわめて不十分である現在、本稿には數多くの缺點があるに相違ない。その點について、博雅の御示教がえられれば、私としては、幸いこれにすぎるものはない。

丘長春の歿後、その高弟であつた尹志平や李志常が、あいついで教團の統率者となつた元初のころには、丘長春の「西遊」によつてきづかれた基盤にたち、モンゴル朝廷の外護に支えられた全眞教團は、めざましいまでの發展を上げた。その有様を、道教はじまつて以來の盛況だとのべた人々もある。各路には全眞道士の道官がおかれ、道觀の創建、擴充も各地でしきりに行なわれた。道教の石窟は、私の知るかぎりでは、中國には三窟しかないが、その二窟とも全眞道士の手によつて開かれたものである。<sup>(53)</sup>このようにしてその教勢は、ほとんど華北以北を席捲するかにみえる状態となつた。従つて、その間には多少横暴なことも行なわれれば、立教の精神にもとるふるまいをする道士もあつた。

かかる全眞教團の隆盛さを白眼視し、嫉視したのは、いわば庇をかして母屋をとられた感のある釋家、とくに禪家であつた。かれらは、全眞道士の手になる老子化胡説をのべた太上八十一化圖をとらえて、<sup>(54)</sup>朝廷に提訴し、ラマ僧とも共同戦線をはつて、憲宗マング朝に道教に對する論争を帝前で行なうようにことを運んだ。これが元代の佛道論争であるが、その遠因は、右にのべたようなわけで、丘長春の「西遊」に求められるのである。従つて長春の「西遊」は、意外な影響を元初の全眞教團に與えているわけである。元代の佛道論争についても、そのいみから、略述すべきかもしれないけれども、他日にゆづりたいと思う。<sup>(55)</sup>なお全眞教團は、論争に敗れはしたけれども、のちいくばくもなく勢いを回復し、明清の兩時代をへて、中華人民共和國成立の前まで、おとろえながらも、その命脈を保つていた。

(昭和三七・八・一六稿)。

(附記) 本稿は數年前にまとめておいたものに、今回さらに手を加えたけれども、なお不十分な點が多い。お氣付の點について細大となく御教示がえられれば、幸いである。なお、佐中壯、吉岡義豊、梅崎諦道の各氏に對し、非禮をお詫びするした



いである。

- 1 拙稿「金元時代の道教々團の性格」(和田博士還曆記念東洋史論叢所收) 参照。
- 2 吉岡義豊氏「道教と佛教 第一」(日本學術振興會刊) 一七三頁―一七四頁。
- 3 完顏璫碑は甘水仙源錄卷一(上海版道藏第六一冊)所收。
- 4 正しくは重陽立教十五論という立教十五論(道藏第九八九冊)は、全卷三教の調和思想にみちている。全真道士の詩集中にみえるものとしては、重陽全真集卷一(道藏第七九三冊)の答戰公問先釋後道、同卷の孫公問三教、同卷の永學道人、重陽分梨十化集卷上十一枚裏(道藏第七九六冊)の熱心香、馬丹陽の洞玄金玉集卷五(道藏第七八九冊)の證修吟、丹陽漸悟集卷下(道藏第七八六冊)の自戒第二首、譚長眞の水雲集卷上(道藏第七九八冊)の三教、王玉陽の雲光集卷四(道藏第七九二冊)の神光燦、丘長春の礪溪集卷一(道藏第七九七冊)の師魯先生有宴息之所勝曰中室又從而索詩、姬志眞の雲山集卷四(道藏第七八三冊)の三教、王白雲の草堂集(道藏第七八六冊)の誠釋道相辨などと題する諸詩詞があげられる。
- 5 紫微觀記(元遺山文集卷三五)による。
- 6 甘水仙源錄卷九(道藏第六一三冊)所收の大金陵州修靈虛觀記による。本記は金の興定三年(一二一九)に撰せられているから、いわゆる「至元佛道論争」の以前である。
- 7 全真教の五祖説は、馬丹陽との合作にでたものと考えられる。それらのくわしいことについては、拙稿「王重陽の遇仙説話に就いて」(東亞論叢第六輯)参照。王重陽が道德經や陰符經の讀誦をすすめたことは、丹陽真人語録(道藏第七二八冊)に、黃庭經については重陽真人授丹陽二十四訣(道藏第七九六冊)にみえる。
- 8 丹陽真人直言(道藏第九八九冊)参照。なお、この場合の「神仙」とは得道者のいみである。また丹陽真人語録には、道經の諸説は一言でいえば清淨をといっていることになるかとみえている。
- 9 この一段のややくわしい説明については、拙稿「全真教團成立に關する一考察」(宗教研究第一五七號)第二節のうち、「教

團の概要」の部分参照されたい。

10 前註同稿参照。

11 姚從吾氏の説は、同氏「元丘處機年譜」（錢穆氏等撰「中國學術史論集」第四冊所收）にみえ、梅崎氏の説は、同氏「長春真人研究抄」（望月佛教文化研究所編「佛教文化研究」第一輯三〇一頁）にある。

12 佐中壯氏の説は、同氏「長春真人の西遊に就いて」（史學雜誌四四ノ一）参照。梅崎諦道・姚從吾兩氏の説は前註同稿にみえている。なお、梅崎氏には「長春真人丘處機について」（史淵四五輯）と題する講演抄録があるが、その内容は前註同稿と大差ないようである。

13 丘長春の傳記關係資料としては、元史卷二〇二、新元史卷二四三、金蓮正宗記卷四（道藏第七六冊）長春丘真人傳、金蓮正宗仙源像傳（同上）長春子の條、歷世眞仙體道通鑑續編卷二（道藏第一四九冊）丘處機傳、甘水仙源錄卷二（道藏第六一一冊）長春真人本行碑（陳時可撰）、雲山集卷七（道藏第七八四冊）長春真人成道碑（撰者不明）、至元辯僞錄卷三（大正新修大藏經第五二冊）、王圻「續文獻通考」卷二四三、輟耕錄卷一〇丘真人傳、長春道教源流卷二一三（陳教友撰）などが主なものであるが、七眞年譜（道藏第七六冊）、泰安縣志、棲霞縣志及續志、鳳翔府志、陝西通志、齊乘、岱覽、嶗山志などの地志、山志類にも略傳や關係資料が収録され、小柳司氣太博士「白雲觀志」によれば、北京の白雲觀内には、張瓊所撰の長春丘真人道行碑をはじめ丘長春關係の四基の碑が現存している。また礪溪集のなかにも傳記の缺を補う詩詞がみえる。尹志平の清和真人北遊語錄（道藏第一〇一七冊）も参考になる。なお、長春真人西遊記（李志常輯、道藏第一〇五六冊）にも傳を補足する記述が散見する。

14 甘水仙源錄卷六（道藏第六一二冊）所收。趙著撰。

15 甘水仙源錄卷四（道藏第六一二冊）所收。張邦直撰。

16 馬丹陽の略傳とその教理や教團勢力形成に果した役割については、註9拙稿を参照されたい。

17 吉岡義豊氏「道教の研究」一六二～一六三頁。

18 清和真人北遊語録は道藏第一〇一七冊所収。編者は李志常である。

19 七真年譜は大定十、十一、十二年の條による。全真第二代丹陽抱一無爲真人馬宗師道行碑は王利用の撰である。

20 七真年譜大定十年の條によれば、王重陽の臨終に立會つたのは、馬丹陽、譚長眞、丘長春の三人のみであつて、劉長生は「遁去」していなかった、ということである。劉長生の「遁去」に疑いをいだいた吉岡義豊氏は、その著「道教の研究」(一六二頁～一六三頁)において、七真年譜にはこのようにみえていけれども、他の諸文獻では「遁去」をいわず、四子共に師側に在つたように記るされているから、眞相は明らかでないといひ、さきに私が本文中でふれた王重陽の臨終のことばを説明したのち、金蓮正宗記の重陽王真人の條の臨終をのべた個所に、かれが「一姪二子一山侗。連予五箇一心雄。」といひ、また「一弟一姪兩箇兒。連予五逸做修持。云云」といつていふことから考えると、臨終の場所には重陽共に五人の師弟がいたと考えられるから、長生は遁去してゐないことになる。かつ七真年譜の重陽の遺言中には長生の諱がでてゐるから、當然その席にいあわせたとも考えられる。「或いは丁度外出してゐて臨終に間に合ふことができなかつたと解釋すれば、しいて遁去の語を用いる必要がない。とにかく、年譜の『時長生遁去』の語は、何か餘計な挿入句のような氣がするし、重陽の遺告に長生の諱がでてくると矛盾するのべて、長生の「遁去」について否定的な見解をのべてゐる。

たしかに、「遁去」の語について「挿入句」的感じがするのは事實である。けれども、吉岡氏の右のような考察の態度は、資料のとりあつかい方において嚴密性にかけているきらいがあるとともに、資料の勝手な曲解、資料にまつたくもつかないほしいままの臆測があつて、多分に非科學的なのにおいがする。他の諸文獻が長生の遁去をいわないといつても、傳記のことであるから、不名譽なことはいわないのが當然である。また、他の諸文獻では四子がともに師側にあつたように記るされていると吉岡氏はいうが、四子がともに師側にあつたと明記している資料は、金蓮正宗仙源傳の重陽子の條ぐらひであつて、他の資料はその點を明記してはいない。吉岡氏はまた、重陽がのべた僞制的親族關係を師弟の間に認めることばによつて長生がそ

の場にいたとみる論據の一つにして、重陽の遺告に長生の諱がでてくることをも加えて、「遁去」を否定する口吻である。けれども、劉長生の名がでるのは、一度弟子になつたものは、たとえ師にそむいて他去したとしても、弟子と認めている師としての考への發露にすぎないから、在否を論ずる場合の論據とはなしえない性質のものである。いいかえれば、かりにその場になくとも、かかることを使用することはできるのである。とくに「丁度外出していて」臨終に間にあわなかつたというにいたつては、あまりにも非科學的であつて、確實な資料の上にたつて着實に立論するのが建前である研究者のかりにも口にすべきことではないのではなからうか。資料の取扱いはとくに嚴密にすべきだと考える私には、何としても納得しかねる點である。七眞年譜は、編者李道謙の後序によれば、編者なりに事實を伝える努力をして編集してある。たとえば、文集や傳記をあつめたが、その場合に、記述に矛盾があつた際には傳記をすてて文集をとつたといつてゐるのは、一應正しい態度といわなければならぬ。傳記には、往々にして溢美の言があるからである。従つて、もし七眞年譜と傳記とのあいだにちがいがあつた場合は、一應七眞年譜の記述に據るべきである。とはいへ、われわれとしては、一應考證しなければならぬことは、いうまでもない。しかも、清和真人北遊語錄卷二には、つぎのような一段がある。

後祖師臨歸正。臘月中。四師乞到錢物。令多買薪炭。大燃於所寢之室。室甚小。令丹陽長眞立於内。而不任其熱。令長生長春立於外。而不任其寒。内不敢出。外不敢入。如此者久。長生師父不堪其苦。乃遁去。至正月四日。祖師臨昇。三師立牀下。云云。

清和真人北遊語錄には、尹志平がその師丘長春から直接耳にしたことが數多く收められてゐるから、その記述は信用してよい。さらに、歷世眞仙體道通鑑續編卷一王霄傳にも、まつたく同様の記述があるから、長生が「遁去」したのは、事實としなければならぬのである。けれども、師の死後には長生ももどつてきて、その中には他の三子と行動をともしたことはたしかである。なお、道教研究の大家として自他ともにゆるす長友吉岡氏に對して、あえて非禮の言辭を弄したが、道教研究の將來を思ふの切なるあまりのこととして、同氏の寛恕を請いたい。

- 21 長安に自然錢をつのつたという原文は、「於長安。化自然錢」である。自然錢とはおそらく喜捨の金錢をいうと思ひ、本文のよりにのべた。博雅の示教を請いたい。
- 22 玄風慶會圖は、民國十四年刊。私が先年北京の白雲觀に滞在していた際に、ときの監院故安世霖師から一本を贈られた。
- 23 丹陽真人語録は道藏第七二八冊所收。編者は王頤中である。
- 24 秋澗先生大全文集卷五六所收、大元故清和妙道廣化真人玄門掌教大宗師尹公道行碑銘并序による。なお、全眞道士が日に一食に止めた例も一、二あり、たとえば甘水仙源錄卷三所收、終南山重陽萬壽宮洞眞子真人道行碑（楊奐撰）、終南山祖庭仙眞内傳卷下（道藏第六〇三冊）、洞眞真人傳などにみえている。
- 25 丹陽真人直言（道藏第九八九冊）による。
- 26 睡眠を禁じたという例は相當な數にのぼるので、ここでは二、三の例をあげるに止めておく。甘水仙源錄卷四の離峯子于公墓銘には「吾全眞家禁睡眠。謂之煉陰魔」とあり、前掲の秋澗先生大全文集卷五六の尹公道行碑銘にも、「道家者流（全眞家の謂）以禁睡眠。謂之消陰魔」とあり、同集卷六一の提點彰德路道教事寂然子霽君道行碣銘并序には、「全眞家禁睡眠。謂之消陰魔。服勤苦而曰打塵勞。以折其強梗。驕吝之氣」とある。このほか、甘水仙源錄卷七の洗澄子然先生道行碑銘、終南山祖庭仙眞内傳卷中の趙九古・畢知常、同書卷下の洞眞真人・圓明真人の各傳、および金蓮正宗仙源像傳の丘處機傳などにもみえる。
- 27 磻溪集卷一所收。
- 28 丹陽漸悟集卷上（道藏第七八六冊）贈明月散人第三首による。
- 29 丹陽真人語録による。そこには「師言。祖師道。不得着好衣。不得喫好飯。唱歌打令。只要心頭物物不着」とある。
- 30 高功法師の位置や資格については不明である。示教がえられれば幸いである。
- 31 學仙記も開天記もともに現存していないので、その内容はわからない。

32 以上は西遊記卷上によつた。

33 李志常に關するこの一段の傳えは、西遊記のなかにはまつたくみえない。おそらく自分に關することなので、西遊記編述の際に、李志常が故意に削つたものと推測される。この一段は、甘水仙源錄卷三所收の清和妙道廣化真人尹宗師碑銘并序（弋穀撰）および同卷所收の玄門掌教大宗師眞常眞人道行碑銘（王鶚撰）によつた。

34 この一段は、前註にかかげた尹志平の傳によつた。

35 元史釋老傳の誤りとしては、眞大道・太一兩教團の成立時期や眞大道教の開祖の名などがあげられる。

36 重陽教化集は王重陽の詩集の一。道藏第七九五〜六冊所收。同集卷三は第七九六冊に收められている。晉真人語錄は道藏第七二八冊所收。兩者のあいだには二、三の字句の相違がみられる。

37 重陽真人金闕玉鎖訣は道藏第七九六冊所收。

38 輟耕錄卷十、丘眞人の條所收。なお、歴世眞仙體道通鑑續編卷二の丘處機傳には、詔の抄録が收められている。

39 燕京において丘長春がチンギズハンの東歸をまつてから謁見したいとのべたという西遊記卷上の原文は、「師。闡行宮漸西。春秋已高。僞冒風沙。欲待駕廻朝謁」であり、バラガスの場合は、「是田鎮海八刺喝孫也。（中略）翌日阿不罕山北鎮海來謁。師與之語曰。吾壽已高。以皇帝二詔丁寧。不免遠行數千里。方臨治下。（中略）余欲於此過冬。以待鑿與之廻何如」である。なお後文參照。

40 吉岡義豐氏「道教と佛教 第一」一七四頁。

41 梅崎諦道氏「長春門下雜考」は、龍谷學報三三四號にのせられている。

42 拙稿「初期全眞教團の性格」（東方學第一輯）參照。

43 西遊記卷上には隨行した弟子の數を十九名と記るしてあるが、同書卷下の末尾には十八名の人名しか記るされていない上に、他の資料にも十八名と記るされているから、十九名はおそらく誤記と思われる。

- 44 この上表文は輟耕録卷十、丘真人の條による。
- 45 この勅書は輟耕録卷十と西遊記卷下末尾に附載されているが、後者には字句にわずかの誤りがあるので、ここでは前者によつた。なお姚從吾氏は、この勅書は耶律楚材の筆になつたといひ（「元丘處機年譜」二九頁）、岩村忍氏も同意見である。岩村忍氏の意見については、同氏「長春真人西遊記」（筑摩書房刊）六三頁註六参照。
- 46 西遊の記録は李志常の西遊記にくわしい。岩村忍氏にその譯があるので（前註参照）、くわしくはそれらにゆずつて、ここでは省略する。なお岩村氏譯本には、間々誤譯や誤解があるので、使用する際には、一應原典と對照する必要がある。
- 47 輟耕録卷十丘真人の條、七眞年譜壬午の條、および姚從吾氏「元丘處機年譜」二、丘處機與成吉思汗の條による。なお、くわしくは移刺楚材編「玄風慶會錄」（道藏第七六冊）参照。岩村忍氏「長春真人西遊記」にその譯が附載されている。
- 48 この聖旨の全文は西遊記卷下末尾および蔡美彪氏「元代白話碑集錄」に收められている。
- 49 吉岡義豐氏「道教と佛教 第一」一七二頁参照。
- 50 ただし、この點についてはまだ考察が不十分なので、他日を期したいと思う。
- 51 「長春宮碑銘」は牧庵集卷十一および元文類卷二二所收。撰者は姚巖。撰年は元の成宗の元貞元年である。
- 52 「重陽成道宮記」は宮觀碑誌（道藏第六一〇冊）所收。撰者不明。
- 53 道教石窟の一は太原の龍山童子寺附近にあり、常盤大定博士が踏査された。いま一つは山東省掖縣の南の寒同山にあるが、これはまだ踏査はされていない。掖縣志によれば、七洞があり、諸仙の石像四十九體が刻まれている由である。この二石窟ともに丘長春の弟子宋德方が開いたものである。宋德方はなお、全眞教徒の行なつた道藏の編纂の中心人物でもあつた。
- 54 太上八十一化圖の原文については、註49同書参照。
- 55 元初の佛道論争については、資料の關係から、考究が困難であり、私も手をつけたばかりであるが、いずれ折をえて「元代佛道論争序説」（假題）と題して、その疑問の點を指摘するつもりである。なお關係の論稿として、岩井大慧博士「元初に於

ける帝室と禪僧との關係について」(日支佛教史論叢所收)、野上俊靜博士「元代道・佛二教の確執」(大谷大學研究年報第二輯、二二三頁以下)、高雄義堅博士「元代道佛二教の隆替」(東方宗教一一號)、などがある。